大熊町のDNA

復興と記憶そして未来

オープンディスカッション・スタディツアー

東日本大震災とその後の東京電力福島第一原子力発電所の事故で深刻な被害を受けた土地の一つ大熊町。現在、大川原地区が復興の拠点と位置づけられ町役場新庁舎、住宅団地が整備されました。それでも、町の広い範囲は未だに立ち入りが制限されており、暮らしの記憶が薄れていくことが心配されます。今回のツアーでは、環境省が整備を進める中間貯蔵施設の見学を通して町の現在（いま）を知り、役場でかつての大熊町の「くらし」を伝える資料の展示を観覧。さらにディスカッションやフロッタージュ体験により、地域の記憶、復興後のその継承について考えました。

鎌田清衛（かまたきよえ）

福島県大熊町生まれ。おおくまふるさと塾顧問。２０１１年、原発事故にともない大熊町から避難。大熊町文化財保護審議委員として、町の文化財の保護保全に尽力。２０１１年以前より、大熊町の歴史愛好家と活動しているおおくまふるさと塾に携わり、大熊町の歴史の普及にも尽力している。岡部昌生氏との出会いから、大熊町各所で石碑等のフロッタージュ（擦り出し）を制作。

岡部昌生（おかべまさお）

北海道生まれ。美術家。都市に内在する不可視の記憶や歴史の痕跡を写し取るため1977年よりフロッタージュを用いて表現を始める。１９８０年代後半より広島の原爆の痕跡を作品化するプロジェクトを開始。２０１２年からは福島県の南相馬市をはじめ、飯舘村、大熊町、石川町で作品を制作。 国内外の各都市で制作・展覧会・ワークショップを展開。

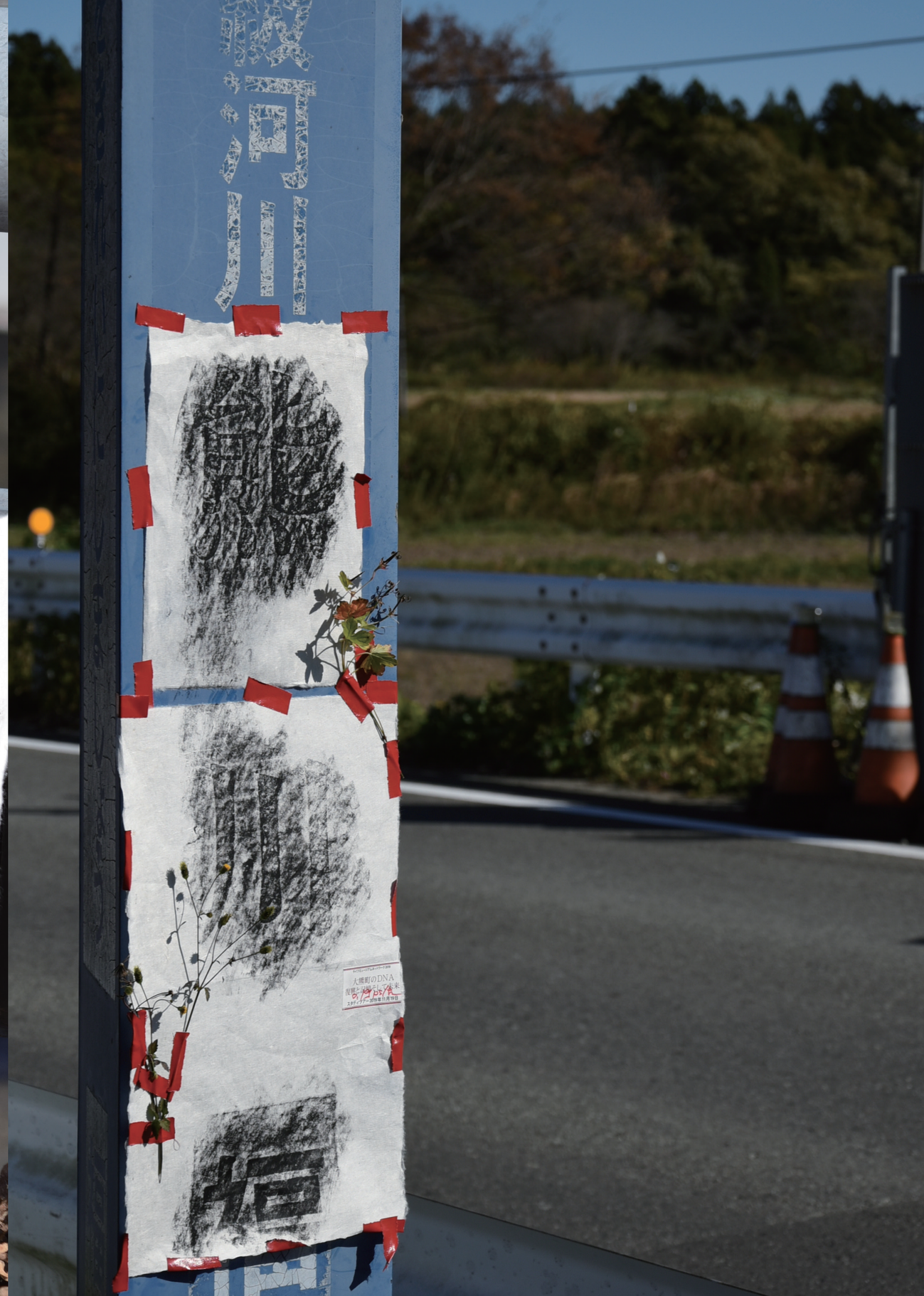
港千尋（みなとちひろ）

神奈川県生まれ。多摩美術大学教授、写真家、美術評論家。大学在学中に南米各地に滞在して以来、赤道や大西洋など世界各地を撮影している。２００７年には第５２回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、２０１６年あいちトリエンナーレ総監督を務めるなど、国内外の文化芸術領域で幅広く活躍。近著に『風景論』（中央公論新社）がある。

喜浦遊（きうらゆう）

長崎県生まれ。福島県大熊町役場教育総務課主事。２０１６年 4月、社会人経験者採用枠で大熊町役場に入庁。企画調整課を経て、２０１９年4月より現職。企画調整課では「大熊町 震災記録誌」（２０１７年3月発行）の編さんを担当し、現在は主にアーカイブズ事業を担当している。

熊川


熊川
熊川
上熊町のDNA

day 1 スタディツアー オープンディスカッション

スタディツアー1　大熊町の現在（いま）

日　　時：11月18日（月）10：30〜17：30
　　坂下ダム→中間貯蔵施設（環境省見学プログラム）→
　　大熊町役場（「大熊町のかつての暮らし」
　　観覧・オープンディスカッション参加）
随行講師：鎌田清衛氏（おおくまふるさと塾顧問）
　　喜浦遊氏（大熊町役場教育総務課主事）
展示解説：本間宏（福島県文化財センター白河館参事兼学芸課長／
　　ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

オープンディスカッション1　残しておきたい大熊のこと

日　　時：11月18日（月）　16：00〜17：00
会　　場：大熊町役場　会議室
講　　師：鎌田清衛氏
　　岡部昌生氏（美術家）
司　　会：塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

共　　催：公益財団法人福島県文化振興財団
協　　力：大熊町教育委員会、おおくまふるさと塾

スタディツアー1
大熊町の現在（いま）

現実にルールが追いつかない

喜浦遊

私は大熊町の教育総務課でアーカイブズといって、町の記録、記憶を残していく仕事を担当しています。ということで今みなさまの前でご説明しています。

大熊町をめぐる状況は、この8年間、現実にルールが追いつかない。今もそうだと思います。3月12日に町民の方がここを出た時は、職員も町長も含め2、3日で帰れると思っていたそうです。こんなに長期化するなんて誰も想像をしていなかったので、お薬も持たずに出た方が結構多い。ちょっと旅行に行くように。

12日の午後3時36分に第1号機が水素爆発する。その状況も避難所のテレビ、その夜の報道で知ったという方が多い。役場職員もそうです。その後14日、15日と、どんどん原子炉建屋の爆発が相次ぎ、「これはもうなかなか帰れない」と長期化の状況が逃げてからわかってきた。

それを踏まえて町長は会津若松市に2次避難を決めます。少し落ち着いて建て直すところを持つべきだということで、4月の頭には会津若松市への移動を決めた。その時の町長挨拶で「1日でも早く大熊町に戻れるように」と言っています。その段階でも、こんなに長期化するとは思っていなかった。避難した後に線量が高いとか、徐々に現状が把握され、なかなか先の見通しが立たない状況が続いた。

5年間は帰らない

大熊町は第1次復興計画で「まち全体が5年間は帰らない」としました。計画は震災から1年半後の平成24年9月に策定された。その間ずっと町民は、自宅にいつ帰れるのか、帰れないのか、除染されるのか、区域も決まらないから賠償額もわからず、生活再建がどの程度見込まれるのかわからないまま、先が見えないまま過ごしたと言えます。行政として「5年は帰りません」つまり「5年間は避難生活を続けてください」と言ったのは1年半後でした。

30年間帰れない

中間貯蔵施設、午後にまた説明しますが、居住地面積で町の3分の1ぐらいにあたり、小学校などもありました。そこの方々は30年間帰れない。中間貯蔵の受け入れが2014年12月に決まったので、そこで自宅や土地を国に売るのか、貸すのか、いずれもしないのかの決断を迫られることになります。

帰還困難区域と言われる、今も避難指示が出ているところ。そこの除染がされるかどうか一部が決定されたのが2014年11月。今から、2、3年前にようやく「一部で除染をします」と国が決定しました。その区域に住む方々は、そこでようやく自宅をどうするかの決断に入れるわけです。残りの部分は、行政的には白地地区と呼んでいますが、除染されるか未確定のところです。ここに家がある方は、自分のお家がかなり荒廃していても、解体するという選択もできません。自分たちの財物をどう扱うかを自分たちが決められない状況がずっと続いている。

大熊町のDNA

今回は「大熊町のDNA」という題です。2017年にアーカイブズ検討委員会を立ち上げた時に三つの理念を作りました。

その一つが「大熊町のDNAを残す」。町の見た目が変わっても、町民が自分と町のつながりを求められる、きちんと確かめられる環境をつくる。また、町を知らずに育つ子どもたちがルーツを知りたいと思った時に、きちんとそこに遡れる環境をつくる。というところをDNAと表現しています。この言葉は、町に戻れない方がいることを前提にしています。

今説明したとおり徐々に少しずつ町との関係が絶たれていくような環境で、この人たちが避難先にいながらもここに来れば、確かにここに私たちの生活があった、ここで私たちは暮らしていたと思えるような資料と環境を町として整えるべきだろうということが、このDNAという言葉を作った核にあります。

先日、釜石に行ってきました。鵜住居では、子どもたちは防災の勉強をする時に津波の高さを「勉強」している。つまり、地元に住んでいても原体験はない年代の子どもたちが育っており、彼らは震災を学ぶ必要があるのだと実感しました。地元の子たちが勉強するような状況がおそらく大熊でもあるでしょう。さらに大熊の子どもたちはここで育っていないので、町のことも原発事故のこともなんとなくわかっているけどわからない状況。自分たちのルーツをきちんと遡って提示できるようなもの、おじいちゃん、おばあちゃん、お母さん、お父さんがどこで生活をしてなぜこんなことになったのかをわかるようにしておくのは、私たちの仕事だと思っています。

DNAというのはそれぞれの人で違う。みんなの核が違うように、何が大熊町のDNAなのか私ははっきりと言えないですけれど、ここの町にあったものは何か、私は県外出身なので震災を経験していませんが、ここに住むことで、私にも少し大熊町の要素が入ってきていると思います。それも一つ核にはなっていくと思います。みなさんで想像していただきながら、大熊町がどういうところで、ここの核はなんなのか想像していただければありがたいと思います。以上です。ありがとうございました。

坂下ダムに向かう

東京電力第一原発の冷却水

鎌田清衛

中間貯蔵施設内で果樹園をやっていました農家でございます。勉強不足でこの辺を知っているというだけですので聞き流しながら聞いていただきたいと思います。これから向かうのは大熊町でただ一つのダム、坂下ダム、坂下という地名です。このダムは素晴らしくきれいです。水は満水にはされていないと思いますが、この水がなぜ必要なのか。この川は大川原川と言います。昔は葉芹川と言っていました。その川の水をせき止めて、農業用水用のダムとして造ったのですが、同時に東京電力第一原発の冷却水として使う目的がありました。半分くらいは、冷却水として地下を流れています、直径60㎝のパイプで運ばれています。これが原発の一次冷却水になる。あそこは沸騰水型で、純粋な水を作っ

大熊町のDNA

て利用しますのできわめて重要なのです。みなさん海水の温排水ということを聞いたことがあると思うのですが、一時冷却に使った水を冷やすのは海水で、ここから行っている用水はすごく重要な水ということになります。

ここは昔、5、6戸の小さい集落がありました。ここから上では中世以降たたら式の鉄を生成していました。鉄鋼場を長期間使うようなものではなく、その場で炭を焼いて、その炭を使って。間もなく到着しますが、このダムの底には5戸ぐらい家がありました。その方々は全部下流に移転しています。ここのダムは大熊町に管理事務所がありますが、中心部が富岡町との境界になっています。ここから先は今回入れません。

坂下ダム

食べることはできません

2月から花が咲いています。2月から9月まで、ここは寒いので時期が遅れます。下から見ると10日以上遅れます。長い間桜が楽しめます。対岸は富岡町。今ここにも魚がいっぱいいます。ヘラブナ、ヤマメも相当数。

「じじい部隊」って聞いたことないですか。「じじい部隊」はここにいました。今年の春まで6人ほど。その人たちがこの辺の山のキノコなどを採って線量を調査しました。そこの向かいから採ったマツタケとこの辺でイノハナと呼ぶコウタケという香りの強いキノコ、それらですと、少ないので3、000ベクレルです。多いのは6、000ぐらいありました。とうてい食べることはできません。

そこの左側の建物の下から水路になっていて東京電力に給水されています。そして、ここから200mぐらい登ると日隠山の登山口です。今日は入れませんが、震災まではここ大川原地区の人たちが4月の29日みどりの日に山開きをして登山をしていました。800人ぐらい登っていました。豚汁を作り、いろいろな接待をしながら楽しんでいました。今のところはまだ入れません。でも、去年、一昨年、私と何人かはもぐりで登ってきました（笑）。黙って行って帰って来てから、調査した線量を地図に書いて「こんなだったよ」と。何も言われませんでしたけど。そんないたずらをしていました。今年は行っていません。

そちらの後ろ、バスの脇に看板がありますね、「美女泣かせのせせらぎ」。川沿いに登っていったところの民話が残っています。私も所属しております「おおくまふるさと塾」、その塾生と発足2、3年の頃にみんなで書いて手彫りをして建てたものです。何基かあってここは今のところ大丈夫ですが、他はだいぶ朽ち果ててきています。

中間貯蔵施設へ

今から中間貯蔵施設に行きます

喜浦

ここは避難指示が解除されている場所ですが、途中、帰還困難区域の中を通り抜けて行きます。自由通行と言いまして、交通の利便性のためです。町民、業者が移動する時に帰還困難区域を通れないと困りますので、そこだけは通行のみ可で、許可証がなくても通行できるようなところが基幹道路の国道6号を皮切りに、少しずつ増えています。先日、双葉町の中が通れるようになり、浪江の方にも抜けられるようになって、自由通行は少しずつ増えています。

今から中間貯蔵施設に行きます。除染が原発事故後に県内の色々なところでやられております。国がやっているところ、自治体が肩代わりしているところがあり、やり方は色々ですが、基本的に家の周りを水の高圧洗浄で掃除したり、表土を剥いで、土地の表面の線量を落としたりという作業が除染です。それで出たごみは黒いバッグに入れられて、各自治体に仮置きされていたのが震災後の状況です。今は福島県内のごみは少しずつ中間貯蔵施設に移動しています。県内全域の問題でしたので、それをいつまでもその場に置いておくわけにはいかない。で、どこに持っていくかというと、やはり双葉、大熊。楢葉も実は候補に入っていたのですが楢葉町は線量が低いということもあって協議の結果、双葉、大熊に持ってくることになっています。それを中間貯蔵施設で30年にわたって保管する。県内で出た除染廃棄物に限ることになっています。

人が住んでいた場所の3分の1ぐらいが

面積が双葉と大熊を合わせて16平方km。大熊町が11平方km、双葉が5平方km。第一原発をくるりと囲むように設定されています。大熊町は、国道6号線と熊川を境に海側、町の面積が77平方kmぐらいなので、ちょうど7分の1ですね。人が住んでいた場所の3分の1ぐらいが中間貯蔵施設になりました。地権者数が大熊、双葉を合わせて、だいたい2、300ぐらいと環境省

でカウントしています。

この地域にご自宅があった方もたくさんおられます。小学校もあった。土地、住宅を持っていらっしゃる方は国に売るか、地上権設定をする。基本的に国は最初「売るか売らないか」という選択肢しか用意しなかったのですけれど、売りたくない方もいらっしゃいましたので、地上権という借主の権利が強い、つまり国がうまく使えるようなかたちで30年間借りる賃貸契約の2択にして、施設を国でつくる。環境省の施設です。

野馬形行政区は全域が中間貯蔵施設内に

大熊町には21の行政区があります。町内会みたいなものですね。中間貯蔵施設に関わる行政区は8。そのうちの3行政区は全てが中間貯蔵施設内に組み込まれてしまう状況です。鎌田さんが区長を務めていらっしゃった野馬形行政区は全域が中間貯蔵施設内に入ってしまいます。そういう方々にとっては、自分たちが住んでいるところ、生まれて暮らしてきたところがすっぽりと施設に取られてしまう状況がある。地権者の方、そこに住まわれてきた方にとってはふるさとの姿が30年間なくなる。基本的には30年間は自分の手元に戻らない。地上権にしても戻ってこない。戻ってきたところで、周りの風景はまったく変わっているでしょう。大熊町としても、町面積の7分の1の地域が施設になってしまうのでは、中間貯蔵施設を受け入れると決めた時点で元の町と同じにする復旧、復興は諦めざるを得ない選択だった。

解体除染

今、帰還困難区域に入っています。ここら辺は特定再生復興拠点と呼ばれていて帰還困難区域の中でも除染をすると決めた地域です。除染が進んでいます。最近は解体除染といって、家そのものを壊して除染に代えるという選択もあります。家の解体が本当に急速に進んでいる地域です。自由通行の通路から家の敷地に勝手に入れないように、右、左にバリケードがあります。

現地ツアーは環境省が月に1回

中間貯蔵施設に話を戻します。今からご参加いただく中間貯蔵施設の中の現地ツアーは環境省が月に1回、設定してやっているもので、今回のツアーでは県立博物館さんが交渉して通常ツアーのオプション、スピンオフみたいなかたちで入れるようになりました。

基本的には、情報館という施設があり、中間貯蔵施設がどういうものか、どういうふうに除染廃棄物が持ち込まれ、安全にきちんと、安全じゃないと困るので、管理された上で施設が運用されているかという説明が主になると思います。

ここに人の暮らしがあった

一方で鎌田さんたちが暮らしてきた地域が、どういうふうに変容していったかは、なかなか環境省の説明からでは読み取れない。回るときに、ぜひ、ここに人の暮らしがあったということを考え、想像しながら回っていただけるとありがたいです。

『震災記録誌』を大熊町で発行しました。そこに中間貯蔵施設関係で二つの証言を入れました。一つは中間貯蔵施設で行政区全域がなくなってしまう小入野地区の方です。平成23年に国から施設建設の話が出た時に住民たちは反対しました。そのころには住民たちは一時帰宅で町に入り、自宅周辺の放射線量の高さを確認するなどして、すぐに帰れる場所ではないと分かっていたと思います。

3月12日の朝のまま

鎌田

すみません、マイクを取りかえしちゃって。ここはスマートインターになっています。だいたいが中間貯蔵に運ぶ運搬専用車で住民は使わないです。周りは放置されたままの水田です。住宅は、ほとんど屋根が見えないぐらいまで草で埋もれていますね。ここは何もされていません。3月11日じゃなくて3月12日の朝のままです。この状況をちょっと目の奥に置いてほしいなと思います。もう少し行きますと、左側に県立大野病院があります。これから使い道を考えようということになっています。左の方にも右の方にも屋根だけが見えていますね。この人たちも避難されたままということになります。

喜浦

中間貯蔵から町の話に戻しますか。ここを通っているので。左手、前の方に見えてきているのが、鎌田さんがおっしゃった県立大野病院。大熊町が帰還を住民に呼びかける時に、医療、福祉関係が一番ネックになると言われています。大熊町としては、この病院を再開してくれるように強く要望していて県からも内諾を得ていますが、色々と条件があって、帰還困難区域の中でもう1回始めるにはハードルが高いようです。この右手は、商店街があったところです。入れないので、なかなか見えないですけれど、この茶色い建物は商工会ですね。ここも復興拠点に組み込まれていますので商工会の建物も、近々解体される予定です。町の復興拠点として新たに整備される地域です。

自宅が荒れていくのを

今、線路の上を通ります。大野駅が右手に見えます。JR常磐線です。来年春には全線開通することになっています。ぽつんと大野駅と周辺だけが帰還困難区域の中でも避難指示が解除される予定です。駅は元々のものをリフォームして使う予定です。

左手の方は午前中に説明しました白地地区。除染の方針も決まっていない。ここにお家がある方々はもちろん自分の家に一時帰宅はできますが、持ち出すこともできなくはないですが、8年経って自分の自宅が荒れていくのを見ているしかない。人によってそれぞれですけれど、なかなか次の、先の見通しを立てられない方もいます。

想像できますか

先ほどの中間貯蔵施設の話が途中でした。全域が施設内に入っている区長さんは、自分の自宅に帰れない、中間貯蔵施設はしようがないと納得するのに3年かかったと言いました。

受け入れを「むしろ決めてくれ」と区長さんたちが町に判断を求めたという経緯がありました。反対している住民もいたかもしれないけれど、決めてくれないと先のことが決められない。そういう気持ちで町に要請したと聞いています。

その後、減容化施設という焼却灰、汚染土、汚染廃棄物を焼却して減容化する施設もその小入野地区で受け入れました。その時も「線量が高い、うちでやるしかない」と総会でしゃべったそうです。

土地を買ってもらえてよかったじゃないかと簡単に言う方もいると、おっしゃっていましたが、「自分が生まれ育って暮らしてきた場所がすべてなくなって、立ち入れなくなることを想像できますか」と、聞き取りの時に言われました。

大川原の方は除染されて、復興拠点があって、戻れる。というのがテレビで報道される時に、自分の家は絶対に除染されることもなければ一時帰宅もないのです。

ちょっと待ってください。スポーツセンターについて鎌田さんがしゃべります。

仮安置ということでお骨を

鎌田

この右側の高台にスポーツセンターがあります。3月11日の夕方、避難指示が出てここに避難させられました。

左側、広く見えますね。この辺は全部、中間貯蔵施設の予定地内です。今、走っているこのラインを境に左側の方、分別処理施設が見えます。右は荒れたままで、まだ見通しが立っておりません。

それから左の方に建物がありますね。大熊町のライスセンターでした。それから右の方はJAのSSがありまして、その右側に梨の選果場がありました。

左側に平べったい小さな新しい建物があります。それは中間貯蔵施設の中のお墓。移動先が決まっていない人は、あそこに仮安置ということでお骨を掘り起こして、仮安置をして2年間は預かります。あとは何とかしてくださいという施設で国が用意したものです。何かこう、気持ちとして合わないものもありますけれども、そういう施設になっています。

間もなく入口ゲートです。この辺も壊され始めています。食堂、カラオケボックスとか色々ありました。

ここが通ったことで、だいぶ交通量は緩和されてきたけれど事故も増えています。私もこの道路を走っていて猪に2回ぶつかりそうになっています。

環境省の事務所に着きました。

事務局・塚本麻衣子

到着しました。ここで環境省の職員の方に乗り込んでいただき中に入ります。しばし、お待ちください。

中間貯蔵施設

なんとも言いようがない

鎌田

今日この車は回らないと思いますが、大熊町の3セクでやっていたヒラメの養殖所があります。ここでフロッタージュしたものがあります。この右の小さい板が。来るたびに朽ち果てていっています。前はこんなに壊れていなかった。なんとも言いようがない感じがします。

ここでは、施設の方が地震になって心配で、駆けつけて亡くなっています。ここで5人亡くなっています。それからその川のすぐ向こうで2人、大熊町で12人が亡くなりましたが、この周辺で7人亡くなっています。

進んでいくと左に見えると思うのですが、崖の左の端はずっと松山でした。その松がほとんど枯れています。津波の波を被って枯れています。この辺で14・5mの津波ですから、この屋根の高さぐらい来ているはずです。

ここにいた大熊町の振興公社の職員2人の方に会ったのですが、かろうじて彼らは2人でつかまって助かった。津波は下から来る、左から来ると思って心配していたのですが、実際は右の後ろの山の方から「後ろから津波に襲われた」と。左側、右側から建物全体を飲み込んでいった。あそこにある電柱が地上から11mぐらいですね、その下4〜5mありますので、だいたいあのくらいの高さの津波が来ているはずです。ちょっと想像できないかもしれないです。

すぐそこが川ですが、川の向かいの杉も塩害で枯れています。1年目ぐらいに初めて一時帰宅した時には、車の中で、線量がピンピンピンと60、70ぐらいに上がって、そのまま帰った記憶もあります。今はそんなにないと思いますね。

原発の境があそこです。

大熊町役場　ミニ展示
「大熊町のかつてのくらし」観覧

磐城飛行場跡記念碑

鎌田

しばらく時間をお借りしてここに出ているも

のについてご説明します。みなさんがこうして来られているのは原発事故があったからです。大震災があって、原発事故があって、それで大熊町がおかしくなっているということでみなさん、集まってのぞきに来てくれた。その元凶になったのは原発。福島第一原発。車の中から遠くに下の方に見えました。あそこには磐城飛行場という飛行場があった。昭和16年から20年まで。その痕跡を示すものは、今あそこの原発の中に何もありません。「磐城飛行場跡記念碑」これ一つでした。他のものは全部壊されました。なくなっています。今は汚染水のタンクだけが建っています。

私と「ふるさと塾」の塾長と2人で行ったのですが、許可を取るまでに申し込んでから3ヶ月かかった。というのは、私たちはここに行って仕事をするのではないので許可が降りないのです。それで、総理府を通して何かの調査という感じで行く。私ら2人にたくさんの人が付き添っています。出入りするのにも普通の作業衣じゃなくて、線量の高いところみたいな鉛の靴を履かされて、防護服と防毒マスクをして出入りさせられました。現場に行ったら「みなさんは作業員じゃないから仕事をしてはだめです」と。そして、私らに「命令だけしてください、私らがやりますから」ということで、その人たちがやったもののコピーです。ですから、縦になったり横になったりして、いろいろです。空白もありますし。

この記念碑は左上から横に読む。長者原の杉本正衛さんが３００ｍぐらい離れたところに住んでいて、ここに飛行場があったという記念が何もないからということで、これを創案して当時の町長志賀秀郎さんに話してつくったものです。

これは表ですけど、裏には合併日が書いてあります。読んでみますね。

（以下、https://www.jpcoast.com/entry/7685.html参照）

「この地起伏少なき松山に、農家散在す。昭和15年4月国家の至上命令により突如、陸軍で飛行場建設決定、住民11戸移転直ちに着工す。当時、工法はトロッコにスコップで手積み、人力で押し逐次軌道延長整地す。作業人夫は請負業者と郡内外の青年団、消防団、大日本愛国婦人会、学徒一般民等献身的勤労奉仕で半ば強制作業で工事が進められた。この地水源なく志賀秀孝氏の井戸より送水使用す。17年早春、宇都宮飛行学校磐城分校発足。20年2月磐城飛行場特別攻撃教育隊として独立。日夜猛特訓を受け第一線配属若者が、御国のため大空に散華す。20年8月9、10日、米軍空母艦載機の大空襲で施設破壊亦各地方の被害甚大なり。20年8月15日終戦となる。

その後一部農地開拓す。昭和23年日本国土計画で中央部以北塩田化海水揚げ天日式で濃縮、旧長塚駅近くまでパイプで送り製品化す。34年イオン樹脂交換製塩発達のため閉じる。亦塩田以外の地23年旧地主に払い下げ25年植林す。37年東京電力株式会社原子力発電所建設候補地となり39年買収41年本着工現在に至る。思い出大き、この地忘れらるを憂い終戦43回忌に当り大戦で亡くなられた人びとの御冥福と恒久の平和を祈り兵舎跡地にこの碑を建立す。

昭和63年8月15日　磐城飛行場跡記念碑建立有志会　大熊町長　志賀秀郎

建立発起人代表及び撰文　長者原　杉本正衛

東京電力（株）福島第一原子力発電所所長」

こういうふうになっています。この杉本さんがやったのですね。裏には11戸の地主の方々とここで訓練した特攻隊の生き残り、その方の名前も載っています。これがあったからこそ、今日こうしてみなさんが集まった。原発の事故以前にこういうものがあったことを知っていただきたいと思って持ってきました。

「熊町城」、途中案内してもらいましたよね。築山にジャングルジムをつくって、その上に鉄板でつくってあります。これは、学校緑化で総理大臣賞をもらったのを記念して昭和48年の卒業生が寄贈した。

これは、明日現場を見ます。紙が小さくて、ここまでしか取れませんでした。「百万遍塔」と書いてありますが、この地方ではなまって「百万べい」と言っています。

これは、「海渡神社」となっていますが「みわたり」と読む。これは先ほど行った小入野の中間貯蔵のすぐ上。

それからこの写真、水産試験の振興公社の大きな水槽の中にこういうのがありました。何かわかりますか。これは、津波で流されて死んでしまった魚を集めて腐敗防止にこうやって組んだものです。たぶん自衛隊がやったと思います。一般では入れませんでしたから。

それから、先ほどバスがＵターンした場所の奥の方に今はあるかどうかわかりませんが、６月16日の時点で屋根の上にこういうものがあってぎくりとしました。この辺で５人亡くなっています。これは胴長ですね。平屋建ての研究棟の屋根に引っかかっています。これが８年間取れずに残っていた。

ここは熊町小学校の近く、玄関に「熊町幼稚園」って中から貼り付けてある。触ってみたら少し凹凸があるので、フロッタージュできないかと思ってフロッタージュしたら、こんなものになりました。

みなさんに、ちょっと注意して見てほしいと思うのは、岡部先生もなさっていますが、その時の線量をメモしておくようにしました。

次にまほろんの方の大熊町の記録写真を。

本間宏

福島県文化財センター白河館、愛称「まほろん」から参りました。本間と申します。

三浦武司

三浦と申します。

本間

現在、大熊町の民俗伝承館に保管されていた資料を、まほろんでお預かりして保管しております。今日は、そこにあったアルバムの中から主に昭和40年から44年頃にかけての写真をスキャニングして拡大したものをこちらに掲示しました。

保管させていただいている、たくさんの文化財があるのですが、そのほんの一部、車に載せられる程度の量を展示しています。

写真の説明は鎌田さんに話していただいた方がいいと思っています。よろしいでしょうか。

鎌田

はい。分かる範囲で。こちらが42年の大熊町の公民館。公民館の前で撮った写真ですね。当時の町長を囲んで、教育委員、教育長、大熊町のいろいろな記録を残してくれた吉田農夫雄さんという教育長は県内でも有名だった。

42年の8月、これは早朝野球をみんなでやっていた時の表彰式です。バレーボールは秋になると毎週土曜日の夜に体育館でやっていました。その優勝の時ですね。みなさん若いけど、今はおじいさんになっている。

こちらは中屋敷です。ここから直線で6㎞ぐらい。そこに分校がありました。開校したところ。今はもう取り壊されて敷地だけ残っています。記念碑だけ建っています。

これは、さっきと同じ公民館。現在の大熊町の中央公民館のところに建っていた。

これはですね、青年学級の活動。こちらに出ている吉田農夫雄さんが「若い者がこれからやっていくのだから」と言って、中学校卒業で止まった人、高校で止まった人、遊んでいるような者まで、そういう人をなるべく集めて人材育成をしていました。

こちらの方は大熊町で一番、戦争の時に働いた人。関東軍の参謀だった吉田農夫雄さん。大熊町の志賀秀正町長と義理の兄弟になって、大熊町の計画は、おそらく吉田農夫雄さんが計画案をつくって実行に移していたのではないかと思います。

私も昭和38年頃、東京電力に行くあの道路と統合の中学校の青写真を見せてもらったことがあります。昔の青写真って本当に青写真で、青いコピーみたいなやつ。あれをつくっていたのを覚えています。

この祭りは夫沢地区、東京電力の西側。真西の方にある集落の「長者原じゃんがら念仏太鼓踊り」です。大熊町では「熊川稚児鹿舞」とこれが町の無形文化財に登録されています。

これは熊川の鮭の放流ですけど、だいぶ古いです。熊川の梁場というのがあって、その南側で養殖して放す。

キノコの仕分け。これは大川原地区あたりじゃないかと思います。共同でやっていたものだと思います。打ち込みじゃなくて菌床を使って。

こちらは、今のここの役場でなく震災前の役場。あそこに中学校があって、公民館があります。今は旧庁舎と庭園になっていますね。あそこだったと思います。このくらいしかわかりません。

帰還までお預かりしております

本間

ありがとうございました。こちらには考古資料、民具などを並べています。この近くにソーラーパネルが並んでいるところ、道平遺跡という有名な縄文時代の遺跡がある。そこから出土した資料が本当にたくさんありますが、ほんの一部をこちらに展示しております。

まほろんには、この写真にありますが、こうした温湿度管理ができる仮保管の施設が全部で5棟、プレハブ建てですけれどありまして、その中に大熊町と双葉町と富岡町の3町の資料館にあった資料をすべて帰還までお預かりしております。

なぜ保護が必要だったか。放射線の問題より、人がいない、電気も通っていないので空調管理ができずカビの心配が出てきた。

双葉町の資料館、富岡町の資料館では、すでにカビが生え始まってしまったので、資料を保護するためには人が管理できる場所に避難させる必要がある。新たに施設を白河につくって現在は私どもがお預かりしています。

これは、大熊町民俗伝承館から資料を運び出すときの写真です。運び出すに当たって、資料が放射能汚染されていないかどうかをＧＭ管で測定して、基準を設けて安全なものから運ぶようにして、現在は全点お預かりしております。放射線量も測定していますが、建物の中のものについては基本的に放射性物質を被っていないことがわかっております。

こちらの民具については、地元の方から使い方を教えていただこうと思っております。

だいたい時間でしょうか。

オープンディスカッション1
残しておきたい大熊のこと

塚本

これから今日の振り返りを兼ねオープンディスカッションのかたちで、みなさんとお話しできればと思っております。ディスカッションからご参加の方もいらっしゃいますので、少し繰り返しになってしまいますが、今回の事業についてご紹介させてください。

福島県立博物館が中心となって震災遺産を集める「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」と文化芸術によってこれからの福島を考えていこう、伝えていこうという「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」を行ってまいりました。

その延長線上に、これはもう福島の問題というよりは、広く「いのち」と「くらし」について多くのネットワークの中で考えていければいいなということで、この「ライフミュージアムネットワーク」を昨年から始めました。

ツアーを何回か福島県内でしているのですけれど、今回が3回目、大熊町でツアーとフロッタージュの体験をします。今回、一つフロッタージュ

大熊町のDNA

を中心に据えています。お手元に記録集があるかと思います。「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」で、こちらにいらっしゃる美術家の岡部昌生さんに福島に来ていただき、紙をものに当て、触れて擦りとるフロッタージュ技法で作品を制作して、福島のことを記録、記憶していく作業を行ってまいりました。岡部先生は2015年に大熊町に入られてたくさんの作品を制作しておられます。今日は、こちらに少し小さいものもお持ちしましたので、後で見ていただけるかと思います。

その時に、大熊町をご案内していただいたのが、「おおくまふるさと塾」で大熊町の歴史について深く調べていらっしゃった、今日講師をつとめていただいております鎌田さんでした。岡部先生のフロッタージュを知ってから、鎌田さんご自身で拓本のようにして、碑文、看板などを擦りとることを始められました。

今日は岡部先生そして鎌田さんに大熊町に入られて作品をつくられた2015年当時のこと、今日のツアーで巡ってみてあらためて考えられたこと、フロッタージュを通してどのように伝えていこうとされているのかをお話いただければと思っております。その後の時間で会場からツアーの感想、考えたこと感じたことなどのお話もいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

では、まず岡部先生。福島でのこれまでの活動なども踏まえてお話いただければと思います。よろしくお願いします。

岡部昌生

福島県立博物館とご一緒することが今日まであった、その最初は2009年だったと思います。「岡本太郎の博物館」という企画展がありました。岡本太郎という人が、どんなふうに土地を見たか、想像したか、イマジネーションを持ったかを、提起していく展覧会でした。

会津若松の県立博物館に来て、収蔵作品の祝い膳、大きな漆のお盆、それから城下町を描いた屏風を見て、何かそこから発想できないかと、会津若松城の城壁とか城門のフロッタージュを一緒に並べた。それがはじまりのご縁でした。

その後に震災があり「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」が立ち上がった。今日につながる震災、原発から広がった厄災の記憶を、そこに暮らす人たちと植物も動物も含めて、生きるものの目線から取り出すというプロジェクトにお誘いを受けました。その組織もある程度成果が上がって、一昨年でしたか卒業し、今はライフミュージアムというかたちの組織になったのです。

時代の相を取り出すことができます

フロッタージュは場所とそこで暮らした人間たちの記憶を手がかりにその時代の相を取り出すことができます。取り出すということは、残すことを前提とする人間の活動ですから、それに参加する側の一人として美術を一つの視点として参加したのが始まりでした。

手渡し残す、その具体的なものを見ながら何を想像するか。手で触れた手応えはどういう気持ちに収まっていくか。

果樹園のその先

鎌田さんの磐城飛行場の碑文のお話をうかがいとても感慨深かった。

今日、最初に行った坂下ダム。あの尾根一つ越えたところに15年の真冬2月の初め、雪が積もった製炭試験場の窯跡を訪ねて行きました。その時にご案内してくれたのが大熊町の方々と「ふるさと塾」の鎌田さんたちグループの人たちでしたね。お昼をはさんでの休憩の時に、ここから間近なところに自分の住みかがあって、果樹園を営んでいたとお聞きしました。果樹園のその先、海に近く今日私たちが行ったところに原発があった。その原発のある土地はかつて軍用飛行場の滑走路であった。その後、戦後になって塩田の施設になった。そして大資本に譲られ東京電力に。そして原発。

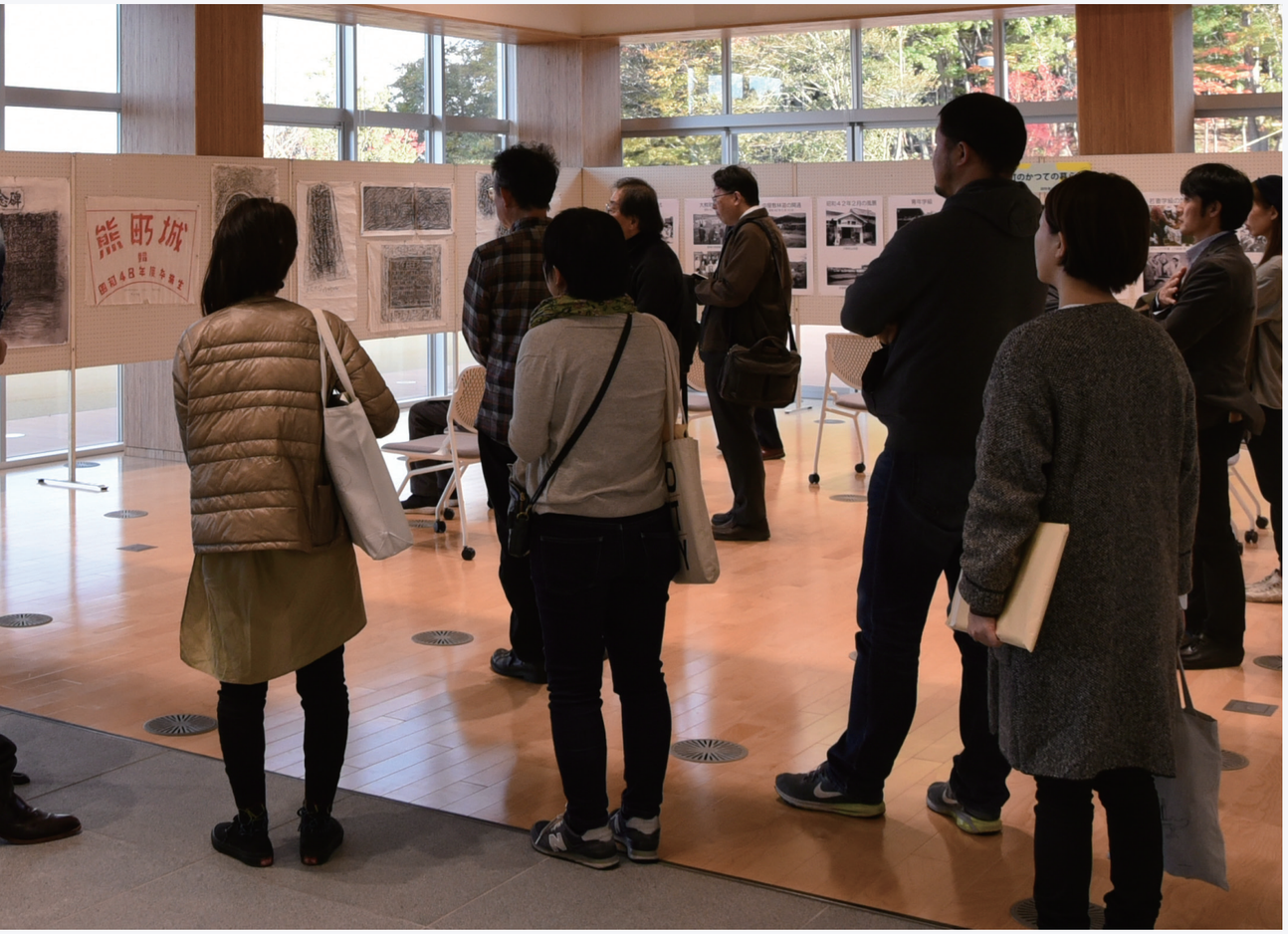
石に刻まれたこと

石に刻まれたこと、石を擦りとる人、残された石碑から何がDNAとして伝わるか。それを考えた時に、そういう記憶が引き継がれ、私たちがそれを見続け、問う、そういう機会が与えられたのではないかと思ったのは先ほどの鎌田さんのお話を再び聞いたからなのです。

特攻隊の滑走路も、専売公社であった塩田も国家の事業であった。それが企業体に売られ、そして原発に。原発が公的かどうかはわからないけれど事故を起こし今日につながる。

残された碑からフロッタージュすることで、碑が刻まれたその行為を、我々はまったく別のかたちで読みとることができる。そんなふうにお話を聞きました。

今日、案内していただいた場所も、そうした捉え方、想像力を駆使するとまったく違う像が



立ち上がってくる。史実が表れてくる。それが今日の一日の時間で認識できたことの一つでした。鎌田さんに感謝したいと思いました。

塚本

ありがとうございます。鎌田さんからも岡部さんと一緒に活動をされた経緯ですとか、今日あらためて感じられたことをお聞かせいただけますか。

切実な時間の流れを

鎌田

はじめに、先ほど車中で喜浦さんが震災後の経過を報告されましたが、震災をどんなふうにここの住民は受けとめたのか、その切実な時間の流れをみなさんにも知っていただきたいと思います。

先ほど6号線を通ってきました。6号線から東は地震で壊されて津波の被害があって、そして原発が危ない。2時46分に地震があり、そして3時半過ぎには「ちょっと、やばいよ」、津波も来るよと。そして、4時過ぎに6号線から東は全員避難しなさいとなりました。大熊町の場合は。一方的に防災無線で告げられただけです。電話も通じません。電気も通じません。テレビも見られません。ですから携帯でやり取りしたのと、防災無線は非常電源で2日か3日動いていた。それだけなのです。

私のところはあのゲートから東で、当時は区長をしていました。私はその時期は梨畑にいました。梨畑で手入れをしていました。そして、立っていられなくて、棚につかまって、だいたい3分か4分こらえていて、少し静かになって動きだした。

母親が寝たきりで3年になっていました。なんとか駆け足で行ってみたら、ベッドが1mぐらいずれていました。その後ろにあったテレビがベッドのずれたおかげで足にかからず、ずれたところに落ちた。ということでけがもなく、ちょっと安心して地区内を一巡しようと軽トラで動き出しました。

だいたい15分ぐらいで一巡したのですけど、まあまあなんとかみんな大丈夫。そのうちに、津波がありそうだということで緊急用の公民館とか小学校の体育館が一応避難所になっていましたので、鍵を開けて入れるような状態にしていました。そこに先ほどの熊川の津波でやられた公民館がありましたね、あそこから、何人かが、怪我をしてずぶ濡れで来ました。私らのところにいて連絡してもおそらく救急車は来ない。スポーツセンターに行けば、避難所になっているから、そこで連絡を取れば何とかなるだろうと、毛布を周りからもらって、たまたまいた消防団員に小さい軽自動車の消防車に乗せて連れて行ってもらいました。

11、500とおりのドラマを

その当時の大熊町の人たちの気持ちは、現在のこのような落ち着いた状況からは、まったく思いも及ばないということです。着の身着のままで逃げ出した。2、3日でなんとかなるだろうと、それがそのままずるずると長くなったのです。11、500人いたのです。11、500とおりのドラマをみんな胸の中に抱えています。それがどんどん薄れてきて8年8カ月が経ちました。でも、まだ傷を背負っている人がいっぱいいる。時々フラッシュバックするのです。

亡くなっている人。大熊町は双葉郡内で震災関連死が一番少ない。でも120人は超えています。平均すると1.6%ぐらいかな。今も増えています。福島県内で2、279人だったかな、昨日か一昨日あたりで。みんなの心のなかには震災と原発の後遺症が残っている。そういうことを覚えておいて欲しい。

自分が今できるものは

岡部先生とお会いしたのは、先生がおっしゃったように、小塚の溜池のところを、雪の中を行ったのが最初でした。実はその前に中間貯蔵の問題が出ていました。6号線から向こうを中間貯蔵施設にする。町は苦渋の選択で検討、承諾しました。住民はその後です。説明会です。これはえらいことになると思いました。それなら、なんとか自分が今できるものはないかということで始まったのです。で、考えましたが、フロッタージュなんていうことは全然頭にありませんから拓本を取ったらどうかと思ったのです。学校の記念碑、校歌、神社、馬頭観音。そういうものの拓本を取ろうと思った。拓本の場合、水を使って、天気が良くても乾くまでにだいたい3時間、4時間。スムーズに行っても大きいものだと1日かかっちゃいます。

岡部先生のやり方を

今日は皆さん、このまま素顔で行きましたけど、我々は中に入る時、車から出たらマスクをして防護服を着てシューズを被せて、そういうふうにして行きます。そんなに怖くはないよと言いますけれど、何10回も入っていますから。少しずつでも気になりましたね。このごろはあまり気にしないですけど、前はだいたい2時間で40マイクロシーベルトぐらいの被曝は普通にしていました。現在は4時間丸々いても3とか5、その程度で済んでいると思います。そういうことでしたので、岡部先生のやり方を見せていただいて、チョークでこうやってできるのなら、もっと早くできないかと思った。本当の話です。

先生はキャンソン紙を使われているということで、それを思い出して、私は今須賀川に住んでいますので、須賀川の紙屋さんにキャンソン紙を頼みました。といっても、あの大きい版はなくてね。小さい60㎝角のを手に入れて、須賀川の人目につかない古い石仏みたいなのをやってみました。やってみたのですが、わりと新しいもの、50年くらい前のものだときれいに出ます。ところが細かい文字になると出ないですね。出てくれない真っ黒になっちゃって。

鮫川和紙

知り合いの鮫川村の齋須寛一さんは、役場職員を退職して和紙つくりを始めた。鮫川和紙というのは全国的にも名前が売れていた。それが、職人がいなくなって1人だけ残っていた。辞めて20年経って90歳でお一人生きているのを知ったらしいのです。で、その人になんとか教えてくれないかということで始まったと聞いています。7年くらいやって、その人の道具を全部譲り受けて、少しそれらしくできるようになった。その頃、私がちょうど向こうに避難して行ったので、楮を切り、皮を剥くのを手伝っていました。困った末に、もしかしたらこれが使えないかと思いついたのは1年ぐらい経ってからです。そして、それを使い始めた。

区別して紙を使ったらどうか

これがホオノキの葉です。同じように乾燥したものを、これはキャンソン紙でやりました。こっちは和紙を使ってやってみました。そしたら、こちらのほうがきれいに細かいところまで出るのです。

硬いものと軟らかいもの、文字の小さいものと大きいもの、区別して紙を使ったらどうかと思って、橋の銘板とか硬いもの、あるいは木はキャンソン紙を使って、細いものは和紙を使う。そうすると日帰りで行って3時間から4時間の間に、小さいものだったら4枚か5枚はできます。そんな感じで大熊に通うようになりました。

だから向こうをとにかく

現実には寝たきりの母親がいて自宅で看ていました。一昨年に亡くなりましたけど、母親に月に2回、4日から5日間ショートステイをしてもらって、その間に女房に休んでもらわないと体が続かない。その間の1日だけ天気がよければ大熊に行く。そして、フロッタージュをしながら自宅を見てくる。そういう方法をとりました。まだ中間貯蔵からこちらは残っています。中間貯蔵の中はああいうふうに壊されちゃうので、どんなふうになるかわからない。だから向こうをとにかくやりたいと思って。

岡部

明日2回やる設定です。みなさんと一緒に拓刷りといいますかフロッタージュを経験してもらう。やってもらう紙が今ご紹介された鮫川和紙です。60㎝×30㎝に分割して持ち運びができるようにした紙を使っていただきます。とても品の良い紙だなと思います。

僕もいろいろな素材でフロッタージュをします。もちろんヨーロッパのキャンソンも使いますしフランスのアルシュ、ベランアルシュという紙も使います。それから韓国の壮版紙（チャンバンジ）というオンドルの部屋の床に敷く油を引いた紙。それから、韓紙の大きいもの。6尺、7尺という大きな韓国の紙、そういうものも使ったりします。日本だと雲肌麻紙という日本画で使う非常に厚い紙には大きいものがあるのです。1人でなく多くの人とやる時には、キャンソンの10mを使う。布でテトロンという大きなロールがあって、これは幅が3mでロットが300mぐらいある。例えば広島の原爆慰霊碑の150mの参道をみんなでやる。そういう大きな作業では紙だけでなくいろいろな素材を使うこともずっとやってきました。

手で触れば大きさがわかる

風が吹いた時には1人ではできないので家内を連れて。実際には4年かかりました。中間貯蔵の中のものはおそらく全部やったと思います。写らなくてもいいからやる。写真に撮ったものは大きさがわからない。フロッタージュは手で触れば大きさがわかる。

例えば「若い力」とか学校の記念碑は、校内で見るとすごく小さいです。小さいですけど、和紙は60㎝×90㎝を何枚か貼り合わせて使うしかない。みっともなくても、とにかく大きさがわかればというのが私の感じ方なのでそんな方法でやりました。なんとか中間貯蔵の6号線から東側は全部終わりました。

最後にやったのがこれです。この「夫沢二区集会所」というのは原発の真西で、今日は行きませんでしたが、ここには3回通いました。取れないのですよ。公民館そのものが2年ぐらいしか経っていないので文字の凹凸がないからできなくて。苦しくなってやったのが、たまたまうっすら映ったところを鉛筆でなぞる。そして後でその中だけ染める。向こうにある「野馬形地区集会場」は40年ぐらい経っているので、木が風化して墨の部分が浮き出て残り、他の部分は削れていく。墨の防虫効果がすごく出ているのがわかります。こんなふうにいたずらしながらやっています。

手触りを自分の体に入れて

拓刷りについて、鎌田さんが先ほど紙を乗せて触るということをお話なさっていました。僕も紙を貼った後に触るのです。対象物とその上に乗せた紙をしっくりさせる。まず、自分の手触りを自分の体に入れていく挨拶みたいなものです。そういうところから始まる。

対象とする物質、石の碑、ブロンズの銘板、樹木の凹凸、道路の痕跡。さまざまな凹凸が時間とともに現われてくる。そういった痕跡を擦りとることをずっとやってきましたから、それに応じた触り方がある。触ることからそれが現われてくる摩訶不思議な二重の構造を行ったり来

たりする。紙を介在しながら。

Stroke

場所と自分の身体とを少しずつ往還し、通い合いながらやっていく。道路でやる「Stroke on the road」、「Stroke」というタイトルが付く作品をひところやっていました。パリの路上、ローマの路上、あるいは広島の路上。「Stroke」は写しとる自分のストロークが画面の中で後ろ（裏側）にある対象と一緒になっていく。ものを写しとりながら、自分も同時に写しとられていく。言ってみるとフロッタージュは対象のかたちだけじゃなくて、自分自身の行為がもう一つ刻まれて残る。非常に身体的と言いますか不思議な往還であることを確かめながらやっていました。道路であれば、自分が立っている足と動かす手が同じ面を触り続けていく。身体の中に丸いかたちができて、そういう往還する一つのリズムで作業する。ものをつくる時の実感、身体の感覚、手応えというもの。それは美術が抱えている特別の行為ではないか。

触って感じたことが残っていく

ただものが写しとられるということではなく写しとることを自分の身体で確かめる。言ってみれば、自分自身の身体の動きが刻まれ残っていくということも同時に経験できる。非常にシンプルですけれど、本当に古い身体の感覚ですね。触って感じたことが残っていく。

先ほどの飛行場の碑文でも感じたのですが、彫って残された碑文は別な読まれ方ができるのです。文面の通りではなく逆も読みとれる。

碑文にとられた表と碑文とくっ付いている裏側の関係を身体の感覚から感知していく。そういう読みとり、感受の仕方、捉え方が可能になっていく。美術家というのは、そういうふうにしてものや振る舞いに学んでいくのではないかと考えながらやってきました。

「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」の始まりから終わりまでずっと参加して福島に触れました。そこで得た作品と今日のような言葉のやりとり、トークやシンポジウム、対話は別なかたちで残されていきます。残すということはまた同時に読まれるということ。一つの共鳴、共感という行為も同時に生まれてくるわけですね。

別な自分を確かめること

明日、自身の手を通じ経験していくと別な自分を確かめることができるのではないか。そういう機会にしたいと思っています。明日、どういうものが用意されるのか楽しみにしています。その経験を自分のものとして、手応えというもののありようを持ち帰ってもらえればいいなと思っています。

今日は2人がしゃべるというよりもみなさんと一緒に会話するということですから、今日1日のことでも、今回のライフミュージアム、いのち、くらしをもっと引き寄せる行為のことでも意見を聞かせていただければ明日につなげていけると思いました。お願いします。

塚本
はい。ありがとうございました。中間貯蔵施設の保管地A、B、Cというアルファベットの記号になってしまった土地に地名があり、人が住んでいた。土地の歴史があった。フロッタージュは表面の奥にあるものに、もしかしたら届いたり触ったりすることができる表現なのかなと思ってお聞きしておりました。明日、それを体験できたらと思っています。

会場のみなさまからも、お二人にお聞きになりたいこと、今日感じられたことがありましたら、ぜひお願いいたします。

優しいメディア

参加者・南波佐間望
お話ありがとうございました。南波佐間望と申します。福島県立図書館で司書をしています。

今日、フロッタージュというものを初めて見ました。記憶をつなぐ方法として、フロッタージュと写真を比較するとフロッタージュは非常に優しいメディアだなという感覚がありました。それに対して、私は写真の非常に暴力的というかあまりにも簡単に撮れてしまう速度がずっと気になっています。スマホでみんな撮るけれど、あまりにも簡単に撮れてしまうことの暴力性に対してフロッタージュはすごく手間のかかることが優しいなと思って見ていました。

これは情報提供ですが、さっきロビーで古い写真を見せていただきました。国立情報学研究所の北本朝展さんが「メモリーグラフ」というアプリをつくっています。それはスマホの画面上に現実の写真と古写真を重ねて表示する仕組みになっていて、透過度を変えて古写真のアングルで今写っている画像を古写真と同じアングルで見られる。

私は皇居の周りでやったことがあります。皇居はやっぱり変化が少ないので、確度を確かめながら、みんなで歩いて回った。すごく楽しい。この古い写真にデジタル的な技術を使うやりようもあるのかなと思いました。

day1　スタディツアー・オープンディスカッション

大熊町のDNA

参加者・紺野文彰
紺野文彰です。大熊町ははじめてです。昔の町並、歴史、そういうところを見たかった。今日は貯蔵施設のあたりの一変してしまった風景を車窓から見ただけなので、もう少し深く散策できないかなという気持ちもあります。

私は出身地が宿場町だった。気仙郡の中心地でしたから、伊達藩の直轄で、鉄砲隊の駐屯地もあった蔵屋敷の町でした。全部やられた。それは上構造ですけど、埋蔵されている道路から何から全部撤去されて、海抜２ｍだったのが１０ｍに嵩上げされた。ですから古い昔の町並は完全に根絶やしにされた。ここで言えば双葉郡の首都です。そこが完全に破壊された。人間の手で破壊されたのです。

私はそういう記録をどう残すかあがいている段階。今回こういう研修があるというので、何かのヒントがないか、私が考えていることをどういうふうに伝え、記録を残すか考えています。また明日でもどこに町があったかを見たい。

先ほどの、鎌田さんのお話のなかで2、２７９名の方とありましたが関連死の数ですか。

鎌田
これは原発関連です。原発の事故で避難して。

紺野
福島全体で2、２７９名。

鎌田
そうです。福島で。

紺野
全体の犠牲者は何名ぐらいですか。

鎌田
直接の犠牲者は1、６１０名くらいの方です。

紺野
1、６００名にプラス2、２７９名。大熊町は12名の方が犠牲になった。

鎌田
はい。直接。

紺野
お一人が揺れによって、11名が津波ということでしたか。

鎌田
ええ。津波です。

紺野
私は陸前高田です。1、８００名が犠牲になりましてね、関連死は入っていません。津波が15、16ｍで町を全部潰したのですよ。それも10分で。ですから津波に関しては敏感になっていて知識はある。ただ放射能というのはまったく想像がつかないので、現場に行って、いろいろな話を聞かなきゃいけない。テレビもだめで、大熊町の場合は警報で津波の高さは何ｍという発表がされましたか。

鎌田
ｍ数は出なかったと思います。

紺野
15ｍの津波が来たけど。警報は３ｍと言ったのですよ。完全に致命的な情報で多くのおじいさんが亡くなりました。絶対、大丈夫だと言って。ベテランの方が亡くなった。まったく違った情報で。そういうことでおうかがいしました。なかったのですね。

喜浦
大熊の場合も同じですね。気象庁からはおそらくエリアメールで携帯などに出ていたと思いますが、３ｍと同じように出ていた。その後、6･何ｍか、正確な数字は覚えていませんが6･数ｍに切り替わった時には、すでに第1波は到達していました。

紺野
われわれも同じです。これは情報の話でした。私もフロッタージュに関しては今日パンフレットではじめて知った。何だろうと思った。お話を聞いて、いわゆる拓本の現代版というか、もっと便利なやり方でできるのかなと理解した。

その表現の際に実際に手に触れるものじゃないと記録できないですね。例えば1軒の家を全部やるわけにはいかない。ある程度限られたものを選んでやらなきゃいけない。

手で印刷する原型

岡部
擦りとる部分をどうするか。部分で一つの全体を想像させるという役割も美術にはあります。丸ごと全部擦りとらなくてもね。そういった残し方、手の動かし方がかたちに現われてくる。

ラビング、フロッタージュという言葉と拓本という言葉は互いに古い物に触れる、残すという手法としてよく知られたものです。石に彫られた文字の書風、スタイルを伝えるために拓本という手法を使い広める。言ってみると手で印刷する原型みたいなものがあったと思う。本当に古い手法、新しくはないです。それから、ヨーロッパではブラスラビングという言葉をよく聞きます。ブラスというのは真鍮、ラビングが擦るということ。真鍮に彫られた銘板、特にこれは教会、礼拝堂に埋め込まれた真鍮の銘板。その銘板の下に教会に功績のあった人たちの来歴が刻まれています。そこに紙を当てオイルチョークに似た金色、銀色のチョークを当てて跪いて触れる。そういう教会の信者さんたちの行為があったことが知られている。

現代美術でよく知られているのはマックス・エルンスト（Max Ernst）。シュールレアリズムの作家として知られていますが、古い床の木目、部分を擦りとることで別な見え方が触発される。物質、視覚、ブラスラビングをつなげながら新しい絵画のイメージを伝える。それを紹介する『博物誌』という画集を出版することによって、美術史にフロッタージュという行為が定着した。僕たちが大学でフロッタージュを学んだ時はそういうふうに教えられた。

紺野
フロッタージュって何語ですか。英語ですか。

岡部

フランス語です。ラビングっていうのは、英語でしょうね。

紺野
ブラスは英語。「フロ」はフランス語から来ているのですね。

岡部
フロッテって言うのかな。擦るという行為ですね。ラビングもそう。擦るという。
日本語で言うと、擦りとるとか刷るということで、行為そのものが技法になっている。あるいは状態が想像できる。新しいことではない。むしろ古い手法で触って感ずるという原初的な身体感覚に近い表現方法です。

紺野
陸前高田では何百という石碑が流され、色々なところの仮置き場に運ばれて、山と積んで保管されています。もう見られないです。いつそれが町に戻され、どこに建てるかも決まっていない。それを考えている人もいない。準備もない。なくなっているものもあります。
フロッタージュ、拓本もポータブルな状態で展示、鑑賞できる。伝承する、伝える、肌に触る。企画展だって何tも重機で運ぶ必要がない。実用的というか有効ですね。

岡部
手で印刷するみたいなものですから。だから伝わってきたのでしょうね。

地名はどうなっている

参加者・原田洋二
ありがとうございます。原田洋二です。中間貯蔵を見たかったのですけど申し込みが遅くなって参加できませんでした。行政の方がいらっしゃればお聞きしたい。先ほど塚本さんがアルファベットで、中間貯蔵施設の番地のようなものが表示されていると言われました。そこにも地名はあったはずですよね。今その地名はどうなっているのでしょうか。消されたのか。その判断は行政がされると思うのですが、どういうプロセスでそれを決定していったのか。おわかりの方がいればうかがいたいです。

喜浦
大熊町役場の喜浦です。質問と少しずれるお答えになるかもしれませんし、鎌田さんに補足いただくかもしれません。車中で説明した21行政区が大熊町にはあって、うち8つの行政区は中間貯蔵施設とそうでないところにまたがっているところもあれば全部含まれているところもある。
鎌田さんがいらっしゃる野馬形地区は全域が中間貯蔵施設になります。野馬形と小入野と夫沢1区は全域が中間貯蔵施設に含まれる。行政区の方々も心配されている。今後この地区はどうなっていくのかと思っていらっしゃいます。町としてはまだ消していません。元の地名はそのままの地番で残っています。
例えば鎌田さんは、中間貯蔵で地上権設定をやられて国に貸すというかたちにしました。売るという選択をされた方もいます。その方の住所も、まだ大熊の例えば小入野、熊川、夫沢の番地で残っています。戸籍にも残っている。そこは、中間貯蔵を受け入れるかどうかという時にもちろん議論になりました。住民の方は残したいという気持ちが強い。自分の土地がそこにないのに、自分の住所はそこでいいのかという議論はあったけど。そこは住民感情を優先してやっています。町としてもそこを消す判断はまだできない。
それがいつになるのかというところにお答えするような検討もなされていない状況です。検討する段階ですけれど。とにかく、その1Aとか、Bとかという下には、まだ地名が残っています。何か補足はありますか鎌田さん。

鎌田
たぶん、あれは環境省の仕事の都合上の数字で、住民にはまったく関係ないものだと思います。どんな施設ができたにしても、その中には昔の割り付けが入っているはずです。

原田
中間貯蔵は30年ですよね。

喜浦
はいそうです。30年後に戻った時にA区、C区という言い方が定着するのかどうかは30年後にならないとわからないです。大熊町としては、小入野は小入野の住所のまま。ここに、もしかしたら住民の方はいなくなるかもしれない。行政区という単位が今後どうなっていくかは別の議論ですが、地名が失われることは大熊町としては考えていません。

原田
30年後は居住可能な地域なのですか。住みたいかどうかは別にして。

喜浦
国は30年後に広大な更地が戻ってくると説明しました。

原田
居住可能になるかどうか。長い歴史の中では30年はあっという間です。

あそこは絶対に返してもらう

鎌田
私たちは賛成せざるを得なくなって賛成した、というのも30年の条件で国がやるということで、やむを得ないからやりましょうということ。そこから先は町民のおおかたも半信半疑でいると思うのです。国が完全に守ってくれるのか。
今年から令和になりました。令和の元号が残るのはおそらく長くて30年、25年。前の上皇と同じくらいの年齢になって令和が終わる時点で返してもらう。あと25年ですから。もう5年経っていますから。住民としては、あそこは絶対に返してもらう。返すということは、それを県外、あるいは国が約束したところに持っていくというのが条件です。

もっと怖いことがある

私が思うには、それよりももっと怖いことがある。ここで言ってしまっていいかどうかわからないですけど県内各地から持ってきた除染廃棄物、あのフレコンバッグの中に入っているものはどんどん放射能も減衰していく。だいたい30年経てば問題ない数値になっているのが大半だと思う。そうしたら、そのまま置かれるということも考えられます。
それより怖いのは第一原発と第二原発の廃炉です。あそこに入っているものは、今日見てきたあれだけのものより、わずか軽トラック1台分の核のものが残ったら、そっちのほうがはるかに怖い。それをどうするかというのが私は一番の問題だと思います。

先借りして使っている

それを残されたら大熊町は原発の墓場になります。原発の墓場になったら福島第一古墳なんて言われるようになるかもしれない。それは絶対に避けたい。それを言うために私は地権者の1人として、大熊町民として言いたいことは言うと思っているのです。私の考え方は、今、住んでいる団地、町、土、それは私らのもの、仮に国に貸しても自分のものだという考えです。これから先に生まれてくる、2代、3代、10代、20代先の人たちが使うべきものを我々は先借りして使っているのだと。これより悪くしないで、次の人に残すのが我々の責務だと思います。

未来の人たちの使うものだから

織田信長でも豊臣秀吉でも徳川家康でも、いくら権力があっても自分では持って行けないのです。こうして300年、500年経っても使っているということは、あの人たちも自分のものではなかったということです。これから生まれてくる未来の人たちの使うものだから大事にして次の世代に渡してやる、私はそんなつもりです。
フロッタージュをどうするのか、残すのかとよく言われますが、そんな気はさらさらないです。とにかく、今は自分でできることをやって、さらりと消えていきたい、そんな感じでやっているだけ。どういう望みがありますかと言われれば、ありませんと、そんな感じでおります。

原田
それは鎌田さんの個人のお考えですが、地権者のみなさんの合意は取れているのでしょうか。

鎌田
地権者会では、国とのやりとり、約束を守れとか、どうするのだという話をしていて、大きな目で見ることはしていないようです。私は地権者会に入っていないですけど。

原田
地権者のみなさんのお話はなかなか聞けないですけど。とても大事ですよね。

一代で滅びてもいいよ

鎌田
そうですね。もう多くの方は土地も手放したし、投げやりになってどうでもいいという方も何割かいると思う。そういう人たちにこれから大熊町をどうするのだと言ったら、もう戻る気もない、どうなってもいいよと。俺一代で滅びてもいいよという感じの方が相当いるような感じはします。
震災後、それまで2世帯、3世帯で住んでいた家庭がどんどん崩壊しています。崩壊というより、やむを得ず借り上げアパートか避難所で生活をするために単位がどんどん小さくなっていきます。その小さくなった単位を、少し落ち着いてきたからといって戻せるかというと、もう核家族になってしまって戻らないです。家庭崩壊は表には出てこないですけど相当あります。夫婦崩壊もあります。

築いてきた文化に対する愛情、誇り

原田
僕も浪江町出身なので被災者の方の事情はある程度把握しているつもりです。先週、このライフミュージアムのスタディツアーで奥会津に行きました。只見の田子倉ダムに行きました。ダムに沈んだ村がありました。そこのミュージアムのふるさと館にも行きました。沈んだ村の人たちの、さっきのここの町役場に展示したようないろいろな民具、当時の写真が展示されていました。そこの館員さんの、悔しさも当然入っていると思うけど、自分たちの住んでいた場所、自分たちの築いてきた文化に対する誇りをとても感じました。それは奥会津だからなのかどうか。
浜通り、双葉郡、浪江も含めた大熊やこの一帯の文化に対する誇りを僕はあまり感じていないのです。それは、どういうところから来るのでしょうか。こちらは原発の問題でした。奥会津はダムです。同じエネルギーの課題を抱えた同じような環境だと思います。それが放射能だからどうこうという問題ではないような気が僕はするのです。自分たちの築いてきた文化に対する愛情、誇り、それが村、町の存続をかたちづくっていくのだと先週感じました。

鎌田

これは私たちも大きな問題だと思っています。何とかしたいと思っています。現実には、それほど真剣に考えている人は少ないと思いますね。自暴自棄になってそのままの印象が見えますね。

ですから、フロッタージュをしたりしていると「なんで大熊のあんな線量の高いところに行くの」なんて、変な目で見られるのが普通。まったく変人扱いだと思います。

塚本

ありがとうございます。お話しいただきたいことはたくさんありますが、時間が迫ってまいりました。最後に、2日目のモデレーターをお願いしている港さんに少し今日の感想などをお話しいただけたらと思います。

港千尋

感想はもちろんたくさんあります。特にバスの中からしか見られない、触れることも空気を吸うこともできないあの苦しさ。その苦しさが体の中に残りました。明日になる前に一つだけ聞きたいことがあった。バスを降りた時か乗る前、鎌田さんが山のかたちを覚えておいてくださいと言われました。それはなぜなのかなと思って。

鎌田

それは明日。明日のネタです。

港

良かった。では明日お願いします。

スタディツアー2 オープンディスカッション2

day 2

スタディツアー2　場と記憶

日　　時：11月19日（火）9：00〜17：30
　　大熊町内（フロッタージュ制作体験）→
　　大山祇神社→百万遍塔→大熊町役場
　　（オープンディスカッション参加）
随行講師：岡部昌生氏
　　鎌田清衛氏
　　菅井優士氏（大熊町教育総務課学芸員）

オープンディスカッション2　場と記憶

日　　時：11月19日（火）14：00〜16：00
会　　場：大熊町役場　会議室
講　　師：鎌田清衛氏
　　岡部昌生氏
　　喜浦遊氏
モデレーター：港千尋氏（写真家／著述家）
司　　会：塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

共　　催：公益財団法人福島県文化振興財団
協　　力：大熊町教育委員会、おおくまふるさと塾

day2　スタディツアー・オープンディスカッション

大熊町のDNA

スタディツアー2
場と記憶

フロッタージュ制作
〈下野上清水　ゲート前〉

菅井優士

帰還困難区域ではタイベックスーツを着てマスクを着用してというのが基本の作業の姿になっております。ここは自由な格好で作業ができる地域ですけれど、やはり帰還困難区域内ということはみなさん意識して作業に当たっていただきたいと思います。

ゲートの先も本当に見た目は変わらないです。もちろん、徐々に中の除染は進んでいますけど、今も立ち入りはできないです。

「なぜここ」を問い続け

岡部昌生

みなさんおはようございます。印象的な空の下です。今、説明がありましたけれど、このゲートの向こう側とここは何が違うのか。日常の生活とほとんど変わらない、この不思議な場所に立つことの感慨がありますね。

我々が今日入ることができる場所は、日常の生活に戻ったとしても大差ない。けれども大きなギャップ、喪失を抱えた場所。この前に立ち何らかのかたちを残していくというのが今日の作業だと思います。

「なぜここ」を問い続けながら、色々な場所に感情を乗せて擦る作業をやっていきます。フロッタージュをした脇に今日の記録をそれぞれメモのようにして書いてもらえればいいなと思います。一つは今日の日付、時間です。それから塚本さんから空間線量を伝えてもらいますので、それもどこかに記録してください。一つの場所の記録が記憶になる。そういうようにして進めていこうと思います。

やり方をお話しますね。赤いテープ。このカルトンには、昨日お話ししました鮫川和紙が8枚入っています。60㎝×90㎝の紙をこの大きさに切ってもらいました。場所によって小さい方がいい、たくさんやりたいというのであれば切って使う。定規がある。

鎌田清衛

水で濡らしてやるときれいに仕上がる。

岡部

これは布テープですけれど、このテープが好きで黒とか赤を、とりわけ赤は大好きだからよく使います。これも作品の一部ですけれど、同時にその場所とつながる一部でもある。それから和紙。手触りがあって、どっちを表にするかは難しいけど、触ってつるつるした方が表。裏の手触りはちょっと粗いから、逆に紙の目を生かすのであればひっくり返してもいいと思います。もう一つはチョーク。拓本の墨を使うのがいいのですけれど、それに近いオイルチョーク。使いさしもあります。みんな均等に新品ではないのは、僕が使った痕跡をちょっと使ってもらう共同作業みたいな意味があって。使ってください。

擦りとる手の感触を自分の中に

場所はみなさん、それぞれの感じた場所でやってください。オン・ザ・ロード。路上の痕跡も一つだし、痕跡がないという痕跡を残すことも。

ゲートは一つの境界線を遮断する物質でもある。例えば、この蛇腹の一部を擦りとるということでもいいかもしれません。特別な形でないところがむしろ意味を持つ場合があります。いろいろな選択をしましょう。

手でちょっと撫でてやるといいね。あいさつです。テープのちぎり方、貼り方、人それぞれでね、個性が表われます。人柄が表れるというかね。これは残りますから、残ることも考えてテープを貼るという人もいるかもしれない。とにかく今日は風が強いですから、作業終わりまで紙が動かないことのためのテーピングだと考えてください。1回紙を凹凸になじませるぐらい撫でる。チョークだけが頼りではなくて、擦りとる手の感触を自分の中に取り込むということもあるので、ちょっと撫でてやる。フロッタージュは、そんなに難しいことではない。力むことでもありません。なるべく自分の体の動きにそったリズムでいいと思います。

やってみますが、もうこれで凹凸が、凸の部分が現われる。もうちょっとやっていくと、へこんだ部分が感じられますね。できるだけ線は長い方がいい。それから一本じゃなくて連続していた方が、凹凸が横、上、下へとつながっていく。

それから、自分の手の動きが一つの方向じゃなく、少しずつこう、線がだぶっていく。ストロークがだぶっていく。そうすると一つの方向、出っ張ったところに、今ちょうど太陽の光があって、ここのところに影ができていますけども、この影と明るいところの感じだけじゃなくて、もうちょっと複雑にやると、その凹凸が今度は紙にこう、見た目と違う凹凸になって現われてくると思います。途切れることなく手を動かした方が、一つのリズムができると思います。どこでやめるかは、その人の気持ちでね、かたちが見えてきたところでやめればいいです。

だいぶ出てきたけど、何かちょっと違うという感じだったら、体の位置、ストロークの方向を変えてやる。出っ張ったところは濃度がだんだん上がってきます。へこんだところは中間の調子が出てきて、出っ張ったところとへこんだところの濃淡が一つのかたちとして現われてきます。

塚本さん、今ここの現場の空間線量を教えてください。0.14マイクロシーベルト。場所によって違ってくると思います。風が吹いているから、また変わるような感じです。わからない時は尋ねたらいい。場所は余白をちょっと空けておけば書き込める。

菅井

ここは下野上清水です。ゲート前。しものがみと読みます。もともと野上村という一つの村でしたがそこから分離した。大川原地区から帰還困難区域に入ると野上村という名前。

岡部

お話をまとめて頭に入れて、メモに取っておいてください。フィクサチーフで止める作業をするといいけど、現場では難しいね。風が強いからね。後でできると思います。

塚本

今回、擦りとっていただいたものの大半は今

日の記憶として持ち帰っていただければと思いますが、できれば1枚事務局に預けていただいて、今後、みなさんで作品をつくったことを残していきたいと思います。

岡部

説明があったシールを1セット差し上げます。紙が大きければ作品の表にシールを貼って、シールがじゃまになるようであれば裏でもいい。シールを貼られると、なんとなくお化粧したみたいな感じで立ち上がってきますね。こんな要領で作業を進めていきます。

大山祇神社

鎌田

この大杉6本、県の緑の文化財指定を受けています。この杉の太さ、みなさん大勢いますので抱えてみてください。何人で手が届くか。4人で届いています。計ると6m15cmでした。国の緑の大木、巨木として認められているのが、目の高さ1m50cmで3m以上、3m50cmですから十分巨木の仲間です。

左側で先生がフロッタージュしようとしておられます。その木とこちらの木の太さはどのくらい違うと思いますか。どちらが太いと思いますか。

参加者・原田洋二

こっちじゃないですか。そっちのほうが太く見える。

木に触れると

鎌田

クイズみたいですけど、さっきここにやったように4人でやるとちょうど同じです。1cmと違わない。巻き尺で計ってびっくりしました。時々上を見てくださいね。枯れ枝が落ちないとは限らない。今日風が吹いていますから。

今、先生がやっておられるところを、我々「ふるさと塾」でフロッタージュしたことがあります。5人がかりで、全部回してやりました。5人がかりで9時から午後2時半頃までかかりました。これ全部やると面白い現象が出ています。

やってみて気づきましたが、肌が、後ろの肌とまったく違うのです。やってみてびっくりです。木に触れるとそういう面白い現象に気づきます。樹齢もはっきりわかりません、300年か400年、杉ですから育ちはいい。400年くらいかなと思う。このくらいの木になると上のほうが折れているのが普通です。ところがここは山の下なので雷が落ちないから先が折られていない。そういう面白い木です。

境界争いに勝った

左の小屋を掛けてあるところ。あそこにこの周辺にあった石仏、供養塔がいっぱいあります。あそこでフロッタージュすればいいかなと思ったのですけど、時間がかかります。大きいものばかりですから。

ここは建て替えをしてから20年弱です。その時「おおくまふるさと塾」で布芝居をしました。この地区に伝わっている、三春論山事件というのが元禄時代にあった。元禄12年に結審していますが、それを布芝居にしてここで奉納しています。三春論山事件というのは、三春領と相馬中村領の境界争いです。江戸幕府275年の間に、東北地方に検視役が派遣されて調べに来られたのは7回しかない。その一つにここが入っている。ここの大川原地区の人は勝訴したのです。この境界争いに勝ったのに対して「おまえらよくやった」ということで、藩主から山をもらった。「おまえらこの山で仲良くやれよ」と、正式に計ったら300町、300haあります。昨日行った坂下ダムから登る日隠山への登山道の中腹です。

その中には樅の木の大木もあります。その樅の木は、大熊町の町の木になっていますね。この地区の人たちは、今になったら山の収入も上がらないので税金も払いようがない、宝の持ち腐れみたいですが、そういう因縁めいたものをずっと守っています。

百万遍塔

鎌田

百万遍と書いてありますが、この辺の人は「百万べい」と言います。ここで、何日か日は決まっていたと思いますが、ゴザを敷いて、数珠繰りといって、大きな数珠、3mか4mくらいの数珠を南無阿弥陀仏、般若心経、そういうのを唱えながら回します。1回回すと1万回の念仏。百万遍、おそらく長い時間がかかったと思います。

大川原の集落からは南西にあたります。南西というのは裏鬼門、未申。反対の方向が先ほど行った清水橋、あそこが丑寅、北東、村の入口で邪気払い、ここからは入ってくるなよと疫病対策をしていた場所だったという伝えがあります。

百万遍と刻んであります。そして上に丸があります。フロッタージュをとってみたけど、ちょっと字が読めないですね、風化していて。つくった年もはっきりしません。たぶんこの辺は真言宗が多いので、光明真言というお題目が何字かあったみたいです。そういう信仰と民俗が融合して地域を盛り上げて栄えるようにしていた一つの象徴です。普通はここに追分石があるのです。南どこ、北どこと、ここは追分石ありません。これが一つの入口。

邪気払いで村を挙げて、主に女性が数珠繰りをやっていたみたいです。その後は直会、慰労会を兼ねていた。そういう民俗的な習慣があった。

オープンディスカッション2
場と記憶

港千尋

盛りだくさんの内容で、今、私たちも午後のツアーから帰ってきたばかりです。まだ体験の整理がついていない状態ですけれど、大熊町の周辺の地理関係や歴史についても教えていただきながらトークを進めていければと思います。

今回のテーマが「DNA」。DNAというのは生命の記憶を伝える遺伝子の本体。町のDNA、町の記憶を伝える本体は何なのだろう。ということを大熊町に生まれ大熊町に住んでいる方と我々、私は東京から、岡部さんが札幌から、外から参加した参加者と一緒に考えていければと思います。

今日の午後のツアーに参加されていない方も半分以上だと思います。回ったコースを少し振り返ることで、地理的なイメージがつかめると思います。まず鎌田さんに回ってきたコースを含め、お話いただければと思います。

鎌田

2日間お世話になりました。極めて田舎くさい、昔の人が言う原風景に近いものが残っていたのではないでしょうか。昨日、話を途中でやめてしまいましたので、あいさつだけして、後でまた説明したいと思います。

今日のコース、通って来たところは、喜浦さんから言ってもらったほうがいい。私は感じるものが薄くなっています、申し訳ありません。

喜浦遊

大熊町役場の喜浦です。今日の午前中は参加せず今から参加です。回ってきたところは、昨日は除染で出た廃棄物を30年間にわたって保管する中間貯蔵施設を環境省の案内で見て、本日は自由に許可証がなくても行ける、活動できるところに行っていただきました。鎌田さんがおっしゃっていた原風景というのは、大川原のもともとのところで、避難指示も解除されて、地域の人が守ってきたけれども地域の人はまだ戻ってこなくて、けれども風景だけは残っているというところかなと思っています。

終わることのない問いを

岡部

ちょっと一言。はじまりは昨日もお話ししましたが県立博物館の企画展「岡本太郎の博物館」。これが2009年です。その時とても印象深かった言葉があります。北海道釧路出身の建築家毛綱毅曠（モズナキコウ）さんが「都市は博物館である、博物館は都市である」と。その言葉が印象的だったのは博物館が抱えている大きさ、活動の広がり方、そして人とのあるいは地域との関わり方、そこに非常に豊かなビジョンを感じさせる。とても好きな建築家の言葉。

少しずつ関わりを持てるようになったのは、「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」がそこから立ち上がって、震災の問題を含めた原発の状況、それが終わることのない問いを発していく状況の中で、一緒にやってきたのが関りの時間だった気がします。去年、一昨年、その活動を卒業生として終えたばかりだったけれども、また呼び戻されたような感じで、こんなふうにみなさんとお話できるのは感慨深いです。

港

我々の後ろにフロッタージュが展示されています。午前中にJVというのですか、そこに行きバスを降りて、周辺の100m四方ぐらいの、極めて限られたところでフロッタージュをしました。とても風が強くてびっくりしました。フロッタージュは紙を地面や木に押し付けて擦りとるのですけど、何人かの方は紙が飛ばされて川の中に落ちちゃったりしていました。その風もたぶん、先ほど鎌田さんがおっしゃった原風景の要素の一つであると思います。地図を眺めて考えるよりも、現実に出ていって触るというのが、まず我々の今日の最初の体験だったと思います。

言い換えれば子どもの視線

フロッタージュというのは、これを見るとわかりますけど、だいたい半分ぐらいは地面というか地べたで、別のものもだいたい低い位置。ですので、フロッタージュという技法は大人が低い視線で周りを見る、そういうきっかけになると思います。言い換えれば子どもの視線といいますか、幼稚園児どころか、もっと小さなよちよち歩きの子どもの高さで世界を見ることになる、というふうに自分はあらためて思いました。

昨日、今日とほとんど姿を見ていないのが子どもであり、そして参加者以外は女性も少ない。そういう意味では他の地域とは違う。我々自身が身を屈めて、まずその地べたから周りを見てみる、そういう経験になりました。

岡部さんいかがでしたか。すでに大熊町には2015年にフロッタージュで入りました。そのとき僕も同行した。今日の神社の大杉ですね、あのフロッタージュの写真はその後いろいろなところで、日本だけではなく海外の展覧会でも発表されています。その4年後です。

手で見る

岡部

4年後のお話から、予告のように紹介しておきますけれど、「東北の震災展」という大きな展覧会がバンクーバーのブリティッシュコロンビア大学博物館というところであります。これは美術だけではなくて、震災を多角的に捉える。日本列島から離れ、漂着した船がバンクーバーに着いた、そういう漂着船の展示もあるように聞いています。震災展というものが少しずつ、来年から、再来年に向けてもう動き出している感じですね。

その詰めを、よく知っている学芸員の方が、日本の女性ですけれども準備をしているところです。この場所についても言葉にして伝えることができるのではないかと思いました。

今日のことで言いますと、目を低く持つという港さんの指摘、自分が立って歩いている足の裏が目を低くすることによって届くところにある。触ることができる。足で立っている身体を手で触っている。僕はよく手で見るという言葉を使うのですけれど、何か目が地に落ちていくみたいな、目が落ちるというのは変な言い方ですけれど、そんな感覚がある。言ってみると足と手がつながっていく感覚ですね。

幼児がよく指しゃぶりじゃなくて足の指をしゃぶる動作を見せるのは、お母さんのおなかの中で丸くなっている時のかたちを連想させる。この連想もとても好きです。そういう身体が丸くなって地上に存在していて、そして手で感受するということです。センサーみたいにして感受する。そういうふうにしてフロッタージュを考えながらやると、色々なところがまた、不思議と手の中に見えてくる感じがする。みなさんとそういう経験をできたのが良かったと思いました。

港

鎌田さん、久しぶりにこの周りをフロッタージュされていかがでしたか、感想といいますか。

鎌田

何度か行ったところですが、やはりみなさんが見る目と自分一人でやる体験はまたちょっと違います。私が来る時は時間が限られて来るので、今日はここと、ここと、ここを3枚とか、この地区に入って何時までにやらなくてはというような感じなので、感じとしては隔たりがありました。

ちょっと戻りまして、昨日のバスの中では写真も何も出せないと思ったのですが、これは熊川に襲ってきた第3波の津波をたまたま梨づくりの仲間が撮っていたものです。半年ぐらいして拡大してみたら、これはなんだ、あれだというのがわかりました。後ろに時間が書いてあります。これは私が撮ったものです。

港

15時44分ですか。

鎌田

はい。後で合わせてみましたら、津波が来て、その後私が、58分、59分と、昨日バスで通ったお寺のあった場所で撮ったものです。よく見たら、もう引き潮になっています。

参加者A

水平線が盛り上がって高くなっているということですね。

真っ黒だった

鎌田

はい、ずっと上がってきてね。たぶんその写真は松の木1本分ぐらいの高さです。そして、今だから言いますが、この津波を体験した人に1ヶ月ぐらい前に会った。南相馬市の方で、逃げながら助かって、海水がどんなものか触ってみたら真っ黒だったと言うのです、その水が。どこの写真でも襲ってくる水は真っ黒ですね。福島県から三陸まで、津波が黒いというのは、その人に聞いてなるほどと思った。その方は手に残ったのが砂鉄だったと言います。この辺は平安時代から砂鉄の産地だった。それを原料に鉄づくりをしていた。砂鉄は重いですから沈んでいる。それを津波が巻き起こして真っ黒い波が押し寄せた。そういうことを私は1ヶ月ぐらい前に聞いてきました。それも一つの発見でした。

日隠山の山頂に

それから、あちこちで日隠山と言葉にしました。こちらが海渡神社、ウミワタリ神社と書いてミワタリ神社。こちらは日隠山の山頂601mです。そして、この日隠山の山頂に日が沈むのが、この神社の本殿といわれるところに立ちますと見えます。これを昨日お話しして途中でやめました。春と秋の彼岸の中日にこういう現象が起きます。

ここを残せるのなら

DNAという話がありました。私事ですがこれをなんとか残せないかと思った。中間貯蔵施設の中で自分の土地を手放さなくちゃならないという時に、私はこれを勝手に担保にしたのです。ここを残せるのなら交渉に応じましょうと言ったのですが、「はい、わかりました」と聞き流されるので、あまりにも癪で、みなさん政治家でも一番怖いのはマスコミですよね。で、マスコミに訴えたらどうかと思って、ありなしの実も集めて書いたのがこの本『残しておきたい大熊のはなし』です。これを自費出版で500部作りました。全部ばらまきました。そして最初は福島民報社の特派員と知り合いになって取り上げてくれたのですが、それを見て各報道が全国紙まで取り上げてくれました。そしたら国も環境省も黙っていられなくなって、これを譲ってくださいというような話がきて、持っていって勉強会をしたようです。それで足りなくなって300追加して、700部は全部自費出版であちこちに配りました。

人の心は通じる

day2 スタディツアー・オープンディスカッション

大熊町のDNA

その結果、昨日言ったようになんとか神社が残るようになりました。残すとは言わないですね、国の方針では。残ってしまったものはしょうがないと、そういう方便を取る。自分から残しましたという例外規程を国の規程につくらせないのです。ですから、いつの間にか知らないけれども、残ってしまったよと。そして、その人たちの責任は逃れる。それでも何とか残せるような状況だったので土地交渉に入ることにしました。

夕べ懇親会で話したことです。私は下手な短歌を作っていてそれが福島民報に連載で4回ぐらい載ったことがあって、連載の最後の日にその時の交渉担当者たちが来た。実はこんなのつくっていますと目の前にあったものを見せました。その一首を見て、それを読んだ担当者が、眼鏡をこうやって拭いた。やかましい国の役人だと思っていたのが、やはり人の心は通じるものだと思って、この人なら任せてもいいかなと思って交渉に応じました。

自分たちの世代で知っているものを

それから百万遍、さっきのところね、あそこもこの本の中に入っています。この中に約70話入っていますが、入り切れないものをなんとかカバーできないかなと考えています。住民としてはこれから先、町そのものがどうなるかわからない。その時に自分の責任ではないですけれど、なんとか今の自分たちの世代で知っているものを記録しておこうと。そしてまとめたものがこれです。

それに入っていないもの。それから大熊町の特産品であった梨。私は梨の歴史を10年か15年してからまとめようと思っていました。思っていた矢先になくなっちゃった。残しておいてもしょうがないですよね、現物が目に入らないのですから。それで、幻の梨ということで巻末に付けておきました。

次の人がやってくれるでしょう

ついでながらもう一つ紹介しておきます。これは今年の8月に出た「ふるさと塾」で約15年かけてまとめ上げた大熊町の方言集です。福島県内では多分みなさんは知っていると思いますが、南相馬市出身の小林初夫先生という方言学で有名な方がおられます。その方に監修をお願いして冊子は小さいですけどそれなりにまとめ上げたと思っています。

方言の紹介で大熊町のDNAが残りはしないですけど、今の我々でなければできないものを記録しておく。後のことは次の人がやってくれるでしょう。こういう人たちがやってくれると思っております。ですから、岡部先生にお習いしたフロッタージュも、現物がこんなものがあるということを残しておければいい、それ以上の望みを私はあまり持っていないです。

港

ありがとうございます。僕も読みたいと思います。岡部さんは読まれた。

岡部

いただいた本があり、読みました。これ、あの時にいただいたのです、昨日も行きましたけど製炭試験場。

港

そうですね、ちょうどあの頃ですね。

場所の置換を教えてもらった

岡部

真冬でした。2月にご案内していただいた。その時鎌田さんのお話に出てきた滑走路跡の碑のフロッタージュが、昨日展示されていました。残された碑はまた読み解くことができる。鎌田さんが擦りとった碑文の中で原発の敷地がかつて海軍特攻隊訓練の飛行場滑走路であったことが伝えられる。その滑走路が戦後に塩田になる。製塩はやはり専売公社、国の機関のようなところに渡って使われた。専売公社は今はなくなっている。たばこもそう。その過程はわからないですけれど、塩田に使われていた場所が東京電力に渡り原発が建つ。それが事故を起こして災害が広がり、今日という、一つの場所の置換を教えてもらったのです。

その経験、「ふるさと塾」の人たちの交流とそのお話が、僕がここで仕事をする時の一つの非常に強いコアになっている。そのことを抱えながらフロッタージュをやりました。県立博物館の「岡本太郎の博物館」から「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」に移り、そうした学んだことを基本に新たなポイントを探っていく活動が一昨年まで続きました。広島の被爆樹も含め福島、広島という日本の災害を抱える、抱き合わせるような企画にもたくさん参加しながら、大熊、福島の場所のフロッタージュが展開していきました。

そのはじまりに鎌田さんが

どれくらいの数をやったか、小さいのも大きいのも含めて、家にも博物館にもたくさん預けてあって、数がわからないですけれど、400点、500点ぐらいはつくっているでしょうか。ノート類、ハガキのフロッタージュ。アエログラムという航空書簡で海外にも送った。500ぐらい南相馬、震災関係の土地が飛んでいったという感じですね。それも僕にとっては大きいと思う。そのはじまりに鎌田さんがいらしたということをみなさんにお伝えしたいと思います。

原子力の風景

港

岡部さんと鎌田さんからあったお話は、二つの異なる風景の記憶です。鎌田さんは原風景という言葉を使われました。民話や方言で伝えられている内容は、すごく長い歴史を持つのだろうと思います。

先ほど百万遍の石碑を見てきました。ああいった石碑で伝えられる、それから樹齢何百年でしょう、あの大杉、やはり世代を超えて、中世にさかのぼるような非常に長い歴史。それがここ大熊のDNAになるのかなと思います。それが原風景。

一方、岡部さんからあった、第一原発の来歴は、軍用飛行場に端を発する。それが塩田になり、払い下げられて最終的には原発になり、それが事故を起こした。で、昨日見せていただいた中間貯蔵施設というふうになっていく。これもまた大熊町の一つの風景です。原風景と対比させるわけではないですが原子力の風景ということになると思います。

二つの風景が折り合わない

負の側面ですが、しかし、現在におけるDNAと言える。で、その二つ、300年の原風景と今後30年間、少なくとも中間貯蔵施設に関すれば、というその全く種類の違う風景、二つの風景が折り合わない。折り合わないし、そこにどうやって帰ることができるのかという問題が今我々を取り巻いている問題です。

喜浦さんに昨日詳しくご説明いただきました。まずその最初の原風景をどうやって残していき、そして言葉で、活字で、もうすでに出版されている、こうしたものをどう残していくのか、そのあたりについて話していただけますか。

循環していく暮らしがあって

喜浦

一番入りやすいのは、この大川原地区。大熊町は全町が避難指示になりましたので、手つかずのままというところも、逆に言うと町民の人が知っている原風景からは少し変わってきているのです。8年の歳月で自然が元に戻っていっている姿かもしれないですけど、人が暮らしてきたところは、里山もそうですが、人の手が入って守られてきたので、入れないところはそのまま失われていっている。

その中で、どうにか私たちが町として手を付けられるのは、ここの避難指示が解除された、許可証がなくても入れる大川原地区だろうなと考えています。

原風景をどのように維持していくか難しいところもあると思います。私は教育総務課で働いていて学芸員資格はないですけど、3人の学芸員がいます。そちらが担当になって、菅井とか森さんが、もともとあったここの民家を残そうとしています。さらに言うとただ民家ではなくて、そこにはここの地域の暮らし、後ろに山を抱えて、山の木を使って家を普請する、敷地内で循環していく暮らしがあって、それをまだかろうじて体現できているところがある。そういうところを具体的にものとして残していけないか考えています。

私の知っている大熊の人たちは

原風景をそのまま残すという意味では、少し違うかもしれないですけれど、今民話の本が会場を回っていますが、面白いと思ったことがありました。鎌田さんは震災があったから「ふるさと塾」の活動しているわけじゃなく、震災前から大熊町の歴史や文化をまちづくりに生かせるはずだとずっと探求して残してこられた。で、震災があって、先ほど子どもがいないというお話がありましたけれども、子どもたちは散り散りに避難していて、今8歳の子どもはその年に生まれて大熊に住んだことはない。この間、8歳じゃないですけれど、10代の子が大熊の民話を夏に読んで、その時にはじめて自分が知っている地域のルーツはここにあると思ったらしいです。地域の人たちに助けられて育ってきたこと、震災の当時も、被災した時に、行政じゃなくて地域の人たちが助け合って避難して毎日を過ごしてきたこと。私の知っている大熊の人たちはここにいると思ったらしい。鎌田さんが残してきたことから、たぶん鎌田さんのことを知らない子が、そんなかたちで自分のルーツに触れる。あの時はなぜ離れなきゃいけなかったのかもよくわからないけれど、迷いの中で、ふと、そこに自分の知っている大熊の人を見るのはとても原風景といいますか、記憶とかそれこそDNAに近いものが受け継がれていくのだなと、この間、ヒアリングしていて思いました。

港

それは具体的にはどういう機会のヒアリングでわかったのですか。

喜浦

アーカイブズの仕事をしていて、大熊町も具体的に施設をつくりたいという段階に来ています。私はよそ者で、鎌田さんのお知恵をいただいています。DNAを探して、お話を聞きますけれど、どうしても大熊町の人たちが何を思っているのか、何を表現したいのか、この町で大事になる核が何なのか、やはり私の中にはまだ全然ない。そこを色々な人から聞きたいという時に、どうしてもご年配の方から聞く機会が多くて、やはり若い人が今大熊をどう見つめているのか、この人たちにとって大熊はもうなくなってもいい町なのかどうかは大事だと思って、それで話を聞く機会をもらったところでした。

港

その取り組みの中に一つヒントがあるような気がします。始まったばかりかもしれませんが、どこかに、これが核ですというものがコロンと

うまい具合に転がっているわけではない。これから探していかなきゃいけない。

そういう時に、やはり鎌田さんの世代、長く住んでいらして、戦前の風景も多少写真を見ればわかる。で、反対にいるのが全く知らない、つまり小学生や中学生ということになります。で、その人たちに会いに行って逆に引き出すというか、教え合うということかもしれません。それによって世代を継いだ交流が生まれるということでしょうか。

喜浦

はい、そうですね。思わなかったところに同じ核がひそんでいた。世代を超えてそういうのを見つけると、これは本当に大熊のDNAなのだと自信を持ってこちらも言えるという気がしました。

港

例えば先ほどの日隠山に彼岸の中日に日が沈むというようなお話も、多分子どもたちは知らない。それをなんとかして知るような取り組みはできないですかね、どうでしょう。鎌田さん、例えばですけれども。

誰も知りませんでした

鎌田

これは子どもたちじゃなくて、大人たちもわからないです。震災前に大熊では広報と公民館報を出していました。公民館報に私も何度かその実態を写真付きで載せてあります。でも、それは新聞を読んだ感覚で、さらりと読まれたというだけで、一般の人に聞いても「そうですか、そんなのあったっけ」というぐらいの話です。で、大人もわからない。まして神社のある小入野という地区、そこの人は誰も知りませんでした。偶然私が見つけたということであって、そこの先人たちがそういう神社を建てたことも知らないし、口伝も残っていません。ですから全くの発見。それをいかにして知らしめるか、なかなか難しいと思いますね。

ですから、「ふるさと塾」では、あそこの神社が大体25マイクロシーベルトぐらいになった時、このぐらいなら防護服を着れば入れるなということで入り始めました。3年目だったと思うのですね。普通4時、今も4時は4時ですが工事者は5時までに出ればいいです。当時は4時に全部出なくちゃだめだった。中で仕事をしても、4時間以上やってはならないという厳しい線量でした。

日隠山と神社の日没観察

許可を取って入っても日暮れは5時30分から5時35分です。これは、東西一直線ですから毎年変わりないです。そうすると6時にならないと出てこられないです。ゲートは閉まっちゃいます。ゲートに立っている人間は5時で閉めちゃいます。ですから、「ふるさと塾」では小入野の人たちと共催で、震災の年に3月21日に行うはずであったイベントが中止になったので、その継続事業だということで教育委員会に拍車をかけて、教育委員会の学芸員が付いて、あくまでも日隠山と神社の日没観察という名目で行っていました。

そういう立ち合いのもとに行かせてもらっているのですけど、それも特別許可がないと出てこられないです。菅井さんが入る前に2、3回は出られなくなったことがあります。我々は3時頃にマイクロバスで入ります。それを見ていますから必ずゲートにいる人たちは連絡します。自分たちが引き上げるので警察に連絡します。パトカーが入っています。で、我々は鍵がないので立ち往生していると、どこからかパトカーが来て開けてもらうというのが3回ぐらいありました。

「ふるさと塾」と地元の抵抗は今も

なぜそんなバカなことをするのだと思っている人もいると思いますが、既成事実をつくっておく、これは大事なのだと。まだあそこが残る見通しも立っていませんでしたので、春と秋のお彼岸には必ず行くのだと。例え雨が降っても行っています。雨が降っても、風が吹いても行く、見えなくても行く、その事実を積み重ねておくという、ささやかな「ふるさと塾」と地元の抵抗は今も続いております。できれば町で募ってバスを2、3台連ねていくようにできればと思いますけど、そこまではなかなかいっていないですね。

製炭試験地

先ほど岡部先生が言われた飛行場と原発と捨石塚の関係。それも残しておきたいと本に書いたのですが、原発になる以前の飛行場で働いていた人たちは軍人です。その人たちが製炭試験地で働いていた。製炭試験地は全国でたった1ヶ所、昭和15年から30年までありました。その炭を何に使ったかというと、昭和30年頃までは台所で必ず炭を熾して、それから薪を焚いてご飯を煮炊きしていた。そのための炭の供給源。もう一つは、ガソリンがなくなった。軍事用にガソリンが使われた。みなさんの先輩だったら木炭車というのを聞いたことがあると思います。自動車が木炭で走る。軍はその木炭車の燃料として必要だった。で、炭の試験地をつくったのと同時に、いい炭は軍に持って行って軍用車を動かすのに使っていた。そのために毎日軍人を何人か製炭試験地の作業員として奉仕作業をさせていた。

捨石塚

その人たちが飛行場で訓練して、16歳から19歳くらいで大体3ヶ月から6ヶ月の訓練が済んだらすぐ現地に特攻隊として送られた。その人たちのために、お国のために死んでいったのだから、あいつらの供養のためだって運んだのが捨石塚なのですよ。

夫沢とまだ町村合併していない大野村で捨石塚が残った。それを証明できるものはない。捨石塚があるのは聞いていたけど、それが戦後70年になってはじめて、そこで働いていた人が自分は10歳頃にあそこで遊んでいたと目撃証言が出た。この本の最後の原稿としてまとめました。まだ証明ができない中、製炭試験地に行った時、先生は気付いて捨石塚に足を運ばれているのです。そういう奇遇があった。

そういうものを残すのはなかなか厳しい。現実だけを私らは記録として残し、次の世代あるいは町に活用してもらう。今の大熊には子どもたちがいないですから。子どもたちに教えようとしても15歳以下の子どもは入れないですから、規制されている場所には。これからの課題はまだまだいっぱいあると思います。

港

捨石塚に僕もご一緒してよく憶えています。岡部さん、いかがでしたか。確か最初、手前の木立で木のフロッタージュをして、さらに奥、かなり奥にあったような記憶があります。

衝撃的な出会いとして

岡部

そうですね。雪の積もった道をずっと通って行くから風景がとてもシンプルな姿で、記憶に残った。雪で、つぶれた家屋、動物によって荒らされた家屋が見られた。震災特有の被害にも気付かされるような風景の中でたどり着いたのです。

捨石塚、鎌田さんから聞くと涙が出そうなエピソードです。10歳の子どもが憶えていた。川を渡る時に川原石を一つずつ抱えて来たのは少年兵だったのでしょうか。彼らがつくった塚なのですね。大きくはない15㎝か20㎝の玉石を重ねて塚にしたようなもの。そこにいつからか捨石塚という文字が刻み込まれて残っていたのが非常に衝撃的な出会いとして記憶に残っています。

不思議な揺り戻し

鎌田さんからいただいた資料の中に、北海道大学の先生が東南アジアに派遣されて炭の生産をしたとあった。実験をそこでやっていたと。昭和15年から戦争末期の出来事ですね。僕はヴェネチアから帰ってきて、広島での仕事の最初に安田学園に行きました。そこに柿の木が1本あって、それが被爆樹木を擦る最初だった。その時に、ガソリンに代わる炭を生産していたというのを聞いていました。それと重なったのです。最近の炭はほとんどバーベキューとかキャンプ用で東南アジアから入ってきている。そういう技術がアジアに根づいていて、今安く入ってきているという不思議な揺り戻しがある。戦争というのはアジアへの侵攻だけでなく、技術をやりとりしながら、また別なものを獲得、生産することが同時進行で行われたことも記憶しておかなければいけないと思いました。

「共に」が大事

港

鎌田さんでさえ70年後にはじめて重い生き証人の話を聞く。今のお話を聞いていて、先ほど言った二つの風景の間をつなぐ糸は見えているものだけではなくこの土地に埋蔵されている歴史、可能性がまだかなりある気がします。

ここから先は福島の方にお知恵を借りなければいけないわけですが、そのDNAをどう見つけていくかは、一つの方法論や課題になるという気がしました。その時に今日のテーマでもありますが共に見つける、その「共に」が大事で、歴史や科学の専門家だけではなくアーティストや今回のツアーを組織していただいたキュレーター、そして映像の記録を撮っていただいているアーティスト、本当に色々な専門の人たちが集まって共に見つけていく。それしかないという気がします。

今日はオープンディスカッションですのでマイクを回したいと思います。どんなことでも、ツアーに参加された方は感想でも、そうでない方は質問でも自由にご発言をお願いします。

岡部

まずDNAの発案者からですね。

港

はい。ではDNAの発案者喜浦さん、森さん。喜浦さんですか「大熊町のDNA」というタイトルを考えた方は。

三つの基本理念

喜浦

そうですね、今回のタイトルではないのですが、昨日言いましたアーカイブズ検討委員会を、2017年につくりまして、そこに三つの基本理念を上げました。大熊町のDNAを残すということと、大熊の新しい文化を紡ぐということ、主張や想いを支える事実を提供するということ。これはもうほぼ独断で（笑）。

岡部

新しい文化を紡ぐ。

港

大熊の新しい文化を紡ぐ。主張や想いを支える事実を提供する。

喜浦

それがアーカイブズ事業を進めていく理念です。DNAは町の人たちの中にあるもの。大熊町では失われていくということが、もう前提となっている。特に中間貯蔵を受け入れた時点から

大熊町のDNA

元の町には戻らないというのが前提で、変わらないもの、町の人が常に支えにできるものは何かをアーカイブズでは表現し、残していかないといけない。

2番目は実は鎌田さんの案。最初は1と3しかなかった。鎌田さんはご自身の経験から先人の歩みに学んで今があるとずっと思ってきている。私たちが生きている今が絶対に次の人たちの価値になる、学ぶものになる。今が次につながるという感覚を持っていらっしゃる。DNAが昔からずっとつながるものだとしたら、今、私がここにいてこれをきちんと残して次につなげるのが2番目。

3番目、原発事故は、色々な見方ができる、色々な見方にさらされている、何が正解かわからないところが多い。町に関しての事実はきちんとまとめないといけない。DNAという言葉を使ったけれども、では、それが何かというのを私が持っていて使ったわけではないのです。

港

これから肉づけしていくのですね。

岡部

ここにいる方からこんなのどうだろうかってヒントがあれば聞いてみたいね。

価値判断をしないということ

参加者・南波佐間望

私は図書館で働いています。当然、アーカイブズについては現場で考えたり、接したりする機会があります。図書館の基本的な価値で、私がすごく重要だと思っているのは、価値判断をしないということです。これは残す、これは残さないという判断をしないというのが非常に重要で、だからこそ図書館は税金で動いているという面がある。

もう1点、総務省の方の言葉ですけど、「ここにいない人のことを考える」という言葉が、私には座右の銘的に何かを考える時について回ります。子どもがいないとか、もしかしたら障がいがある方はここにいないかもしれません。我々が何かを残そうと考えている場にいない人にとって、我々が残すものは何か。この場に参加できていない人のためになる何かを、我々は考えなければいけない。それは重要な視点だと思っています。

圧倒的な現在の景色によって

参加者・牧田義也

司会の港さんがおっしゃっていた二つの風景の対比は非常に印象的です。バスツアーで喜浦さんが「ここでどんな生活があったのかを想像しながら回ってください」とおっしゃっていた。鎌田さんからは「ここで縄文土器が出て」「ここに宿場町があった」と色々お話をうかがった。ですが、中間貯蔵施設地域を出る時に喜浦さんは「結局、環境省の方から説明を受けて、あの圧倒的な光景を目の当たりにしてしまうと、すっ飛んじゃう」とおっしゃった。僕はそれがすごく印象的で、二つの風景があるのですけど、あの中間貯蔵施設区域に関して言えば、圧倒的な現在の景色によって、もともとの原風景が飛んじゃう。そこをどう取り戻していくのでしょうか。非常に難しい問題です。一つには痕跡が抹消されてしまっている。原風景の痕跡が、かなりの程度抹消されてしまった。痕跡の不在の中ですくい上げていくということは、今日回ったところとは違う課題があるという印象を受けました。

もう一つは、価値判断をしないという話がありましたが、実際は何かを残し、何かを残さないという分別の場面が出てくると思うのです。例えば、役場の展示スペースに展示した資料、写真はだいたい60年代で終わっている。その先はどうなっているのか、どこまでを残して、何をDNAとするかはどうしても価値判断が入る。価値判断が入るからこそ、みんなで話し合う「共に」が大事になってくるのでしょうか。感想です。

港

ありがとうございます。今のご感想はバスに同乗したみんなが強く感じた。僕自身もそう思いました。想像しようとするけれども、ベルトコンベアのほとんど現実と思えないあの風景を見ると圧倒されてしまって、なんと言うか、危険な状態になりますね。もうこれは抗えないというような、そこに住んだこともないのに。でもそれを見てしまうと諦めに似たような絶望感に襲われる。谷一つが、まるでダンプトラックが蟻に見えるようなスケール感で、あれを見てしまうと本当に圧倒されてしまう。それにどう抗い、そこに生きる意味を見いだしていくかは言葉ではなかなか言えない難しさがあると思いました。

他にいかがでしょうか。展示されている写真に関してですが、60年代が確かに多い。成人式の写真でしたか、1965年、66年という日付が入っていた。終戦の年に生まれた子どもの成人式。そういう日付に気づくと、胸が締めつけられる思いがあります。どの程度、写真のアーカイブは進んでいるのでしょうか。

菅井

大熊町役場学芸員の菅井です。今あそこの会場で展示している資料は「まほろん」で仮保管してもらっている資料です。もともと大熊町の民俗伝承館という施設に入っていました。その中からの写真です。現在、町も何点あるかきちんと把握できていません。写真もそのうちの一つですが、震災前にどういったかたちで町に資料が寄贈され、あそこにあるのかという情報を把握できていない現実があります。

そこを確認しないといけないです。昨日、鎌田さんから丁寧な解説をいただきましたが、誰が撮ったかとか写真の性格を把握ができていないという問題があって、それは今後、私が調査、研究していかなきゃいけない仕事だと思います。3・11から1回途絶えてしまっているので再調査しなきゃいけない現状があります。

港

そういった写真に関しては僕も取り組みをしたことがあります。このくらいの人数でスライドショーを見ながら、この古い写真は何ですかと僕が聞いて、知っている人から話を聞く。それをずっと台湾でやってきました。台湾は1895年から1945年まで日本の植民地でしたけれども、その期間中に大量の写真が撮られています。そうした写真を、今やっと見直すことができるようになってきた。戒厳令の時代が長かったので、日本の時代に残されたものをなかなか公の場で見る、語ることができなかったけれども世紀が変わって2000年以降、今の学生の世代が、過去に何があったのか知りたい、自分のおじいさん、おばあさんがどこから来たのかとか。

台湾は度重なる支配を受けてきましたので、たくさんの人が大陸から来ている。そうすると、古い写真を見てもやっぱりわからない。そこに映っている人がはたして台湾の人なのか、それとも大陸の人なのか。そういうことについて世代を超えて、このくらいの人数で、まったく何も知らない僕が聞き手になって話してもらう。そうすると、研究者が1人で研究するよりも、雑多な情報が集まるのです。「この小学校はあそこだよ」とか、そんな糸口がつかめてくる。

写真はどんな人でもしゃべりやすい、発言しやすいメディア

大熊町をはじめとして日本の1940年代以前の写真についても同じ手法が使える気がします。もう一つは、写真は専門性があまり必要ないというか、写真を見れば、誰もがそれを写真だとわかりますし、1人でも写真に写っている人がわかると一気に広がる。写真はどんな人でもしゃべりやすい、発言しやすいメディア。ポータブルなメディアですから、何もここだけでやる必要はなく、別の場所にデータを持っていって、みんなで見ながら話すとか、人と人とが集える機会にもなる。展覧会を見ていて写真はそういう使い方もできると思いました。

記憶をすべて失ったら

事務局・筑波匡介

福島県立博物館の筑波です。「大熊町のDNA」というタイトルを使わせていただきました。みんなでここのDNAは何かを考えたかった。以前も喜浦さんに声をかけていただき、中間貯蔵に入ったりしていたのですけれど、町が記憶喪失を起こしてしまうと強く感じていました。

「おまえ自身、昨日までの記憶をすべて失ったら、おまえと言えるのか」と私の師匠からよく言われました。「私自身がある日突然、電気ショックを与えられて、昨日までの記憶を失ったら、それはおまえなのか。だからこそ、歴史、土地の記憶を残さなきゃいけない。なんとなくわかるか」と言われていたのです。その感覚を持ちながらずっとやってきました。中間貯蔵施設に入った時に、それを目の当たりにする。ああ、昨日までの記憶を全部、根こそぎ消されちゃった。ここから先、僕は何ができるのだろうと思った。DNAという言葉を聞いて、でも何ができるかわからなくて、そういうことを一緒に考えられる仲間を増やしたくて、今回取り上げさせていただきました。みなさんからDNAとはというのをどんどん言っていただけば、もしかしたらヒントが出てくるかもしれないし、そこから僕ができることが見つかるかもしれない。それに向かってまた何かやりたい。ぜひともヒントをもらいたいと思ってお話を聞いています。

それは生活ではないか

参加者・初澤敏生（委員）

初澤敏生と申します。今回の「大熊町のDNA」という言葉に私はモヤモヤを感じていました。大熊町は昭和29年の昭和の大合併でできた。その町のDNAとは一体何だろう。昨日からお話をうかがっていて、陸軍の飛行場が上からの力で開発されてこういうふうに変わってきてしまった。そこは行政や政治と結びついていくと思っていたのですが、そういう、外から、上からの動きだけでなく、内からの動きもあったのではないか。

それは何だろうと考えてみたのですけれど、それは生活ではないか。つまり、そこに暮らしていた人たちの生活が一体どういうようにつくられていたのか。生まれてからどういう文化を身につけて、どんなお祭りに参加して、どんなことをして生きてきたのだろう。そういうことをもっと捉えて、それを記録に残しておく。さっき出てきたように、たとえ景観が変わっても、そこの地域が変わってしまっても、それに抗うためにはそこにあった生活を忘れないことが重要。

そういう点から考えると、「大熊町」のDNAではなく「大熊」のDNAのようなので、ほっとしました。どうしてかと言いますと、将来、今度は令和の大合併で双葉市になったら、大熊町のDNAは双葉市のDNAによって上書きされるのか。上書きされるようなDNAだったら、しようがないだろうなと思ったのです。

そういう時に、やはり最後まで残るのは地域の文化で、それをつくってきたのは、町ではなくて、もっと字とか集落とか、そういった単位の生活ではないのか。そういうところの生活を元に戻すことはできないにしても、記録に残す。そういうことが必要なのかと考えていました。すみません、雑談のような話で。

港

day2 スタディツアー・オープンディスカッション

大熊町のDNA

ありがとうございます。ものすごく重要なお話でした。石碑には残らない、それが日々の生活ですから。日々の生活、年中行事、そういった、一言で言えば日常、そこにどういう日常があったのかをまず知ることが必要。それがなかったら、どんどん変わっていってしまう。

何か結果を出すのではなく

参加者・原田洋二

原田洋二です。僕も今の初澤さんのお話を聞いて思ったのですが、似たような感覚なのです。DNAは何かというと、例えばゲノム編集で上書きされる高度な意味でのDNAということになると、つまり定義づけをすると困っちゃうと思うのですよ。

DNAということに定義をつけないで、今おっしゃった小字とか、そういう小さいコミュニティが何をやっていたかを集約して保つというのがDNAでよろしいのではないか。

港さん、さすがだなと思ったのですけど、小人数でディスカッションして、何か結果を出すのではなく、そのプロセス、参加している人たちの熟慮、考え尽くすような時間、そういうものを共有していければ、僕はそれで十分じゃないかと思います。

考え尽くす、そういうプロセスを

なぜエネルギーが原子力でなければいけなかったのか、その根拠も考えずに、ただ電気を消費していた。それが3・11と東電の原発事故の一番の教訓じゃないかと僕は思う。何をやるにも、根拠をしっかりとみんなで考えたのであれば、こういう事故はもしかしたら起きなかったかもしれない。便利な方に進んで結果を早く求めたいと流されるような、そういうものが今の日本には多すぎる。

ですから、あえてここでDNAという根本的なところに取り組むのであれば、やっぱり熟慮、考え尽くす、そういうプロセスをもっと大事にしてもらいたいと思いました。

港

原田さんが言った根拠は何かということ。自分たちの根。昨日、陸前高田から参加した方が「根こそぎにされた」とおっしゃった。町が根こそぎにされたと。その根だと思うのです。根をどう取り戻すか。自分たちの根っこは何かを考えていく、そのプロセスが大事だということですね。

先ほど、このぐらいの人数と大雑把なことを言いましたけど、具体的に言うと15人から最大150人だと僕は思っています。15人から150人のグループが一番いい。どういうことかというと、難しい方法やメディアを使わずに記憶が残る数なのです。ネットワークという言葉を使えば、分解しないネットワークといいますか。それ以上になると、どうしてもセグメントに分けていかないと組織にならない。そのぐらいの数ですと一つの組織のままずっと続いていく。これは古代社会から現代のSNSに至るまで同じと言われています。人類学的に言えば。このぐらいの会を積み重ねることができれば、おのずとそれがDNA的なものになっていくだろうということです。

中村藩領という一つのくくり

参加者・二上文彦

南相馬市博物館、二上と申します。先ほどの初澤先生と同じような感じになってしまうかもしれないですけれど、どうしても僕の場合、歴史を勉強しているので中村藩領という一つのくくりで見てしまう。そうすると相馬から大熊町までは同じ文化という感覚です。双葉郡というのは新しい概念です。中村藩領だと同じように見ていても、大川原を回っただけで全然違うのが実感できる。もちろん海に行けば海の文化で生活も違うわけですし、ここは藩境ということで、それが一つの個性でもある。DNAを設計図という観点で捉えるならば、こういった一つ一つの個性がこの地区の設計図になっているとあらためて確認した。

昨日、僕は行けなかったですが、町場はほとんど入れなくて、また中間貯蔵施設もあって、そういうのもこれからはDNAに入ってしまうのかもしれない。でも、一つ一つの小さいけれど個性的なものがすごく大事。

南相馬も実は同じです。南相馬市と言いながら全然違う。おじいちゃん、おばあちゃんに聞くと、昔こんなのをやっていたとか、そんなの聞いたことないとか、いっぱいある。だから今は一つ一つ丁寧にそういったものを拾い出す作業をやっています。次世代の子どもたちはそういうことを知らなかったりするので、それをどう伝えていこうか苦労しています。

港

一つの藩領の中の風景にも濃淡があるわけですよね。それを伝える企画の工夫みたいなものはありますか。例えば展覧会とか。

二上

地区ごとの展覧会というのはまだ取り組んだことがありません。どうしても南相馬市という一つの自治体のくくりの中なので、そうすると、大川原と南相馬のこれほどの差はなかった。ですから新鮮だなとあらためて確認して、逆にどうしようかなと。

港

もしかすると今後、対照して見せる企画展はあるかもしれないですね。

二上

うちの学芸員で郷土料理を研究している人間がいて、郷土料理のレプリカをつくっています。最近、喫茶店とかレストランのウインドウに並んでいるようなレプリカの業者さんに郷土料理のレプリカをつくってもらっています。そうすると、同じ市内の人でも「こんな料理つくっているの？うちではつくっていないよ」とかいう話がでる。レプリカはわかりやすいというか、とっつきやすいです。博物館活動をやっていて、その入口、興味を持たせる入口をどうしたらいいかということを最近考えています。

港

面白いですね。ここ数年、新しく地域センターが開かれた時によく見るのがジオラマなのですよ。今の世代、そんなに若くなくてもそうかもしれないですが、フィギュアが大好き。町の歴史がジオラマになっていて、その中にフィギュアが出てくる展覧会を見たことがあります。そうすると、それをインスタにアップする。スマホや映像を使って歴史に入っていくようなことが、すでに出てきていると思います。食が一つの好例だと思います、

事務局・小林めぐみ

生活ですよね、それ。

港

はい。まさにそうですね。

ここに来たことでDNAを受け継いだ

参加者・関川歩

関川歩と申します。DNAに詳しくはないですが、DNAという言葉を聞くと、生き物というか、生きていることを思います。タイトルの下に「復興と記憶そして未来」という言葉が入っています。人間が今まさに生きているという意味。大熊町もそうじゃないですか。未来に向けてどう生きていくのかということ。例えばDNAは科学的には人から人に移らないけど、もしかしたら今日私はここに来たことでDNAを受け継いだ。

私はここの生まれでもないし育ちでもないけれど、東京で、私が大熊DNAを持って生きていることで、誰かとまた会話をすることで、それが広がる。私には漠然とそういうビジョンがこの言葉から浮かびました。

港

それは大切なところで、何を今回の成果、トピックとして僕らが持ち帰り、大熊はとても良いところ、こういうところがいいよと伝えられるか。ご当地のお土産じゃないですけど、そういうことも大事だと思います。

今日の話で僕が一番びっくりしたのは春分の日と秋分の日に、夕日がそこに沈むという壮大さです。昔、ピラミッド、レイラインみたいな話を夢中になって読んだことがあるので、それに通じる古代文明のロマンも感じます。ああ、行ってみたい。写真に撮りたいとなるわけですよ。これも同時に考えていくといいと思いますね。

風を浴びながら擦る体験は

参加者・高田彩（委員）

塩竈の高田です。私も日頃から土地の記憶の継ぎ方を考えています。人の中に蓄積させて、継いでいく。風景はどうしても時代ごとに変わらざるを得ないものと捉えていますので、やはり次世代にいかに記憶を追体験させられるかどうか。この地域は15歳以下立ち入り禁止とか色々な制限がある。塩竈でできている子どもたちに伝える場をつくることがここでは難しいとか、女性たちもなかなか集いづらいとか。

でも、鎌田さんのように伝える意志の強い方が色々な場所に出向き、またそこをサポートするアーティストや美術関係者によって、継ぐべきことを追体験する今日のフロッタージュのような身体的、感覚的に憶えていくこと、風を浴びながら擦る体験は、先ほどの関川さんのお話ではないですが私の中にも残っていく。何かしら場をつくり、この故郷ではなくても、違う場で伝える力のある方を囲みながら共有していくことを、継続的に地道にやることで記憶を継いでいくことができるというのを2日間の経験を通して考えました。

港

ありがとうございます。広島から松波さん。

かたちとして残らないものも

参加者・松波静香

広島の松波です。私もDNAというのは、今生きている人の中に残っているもの、あるものだと思う。もちろんものを残す、文字で残す、そういうこともとても大事だと思うのですが、人の体験に残る、例えば方言の響き、目に映る風景、お祭りの音、そういうかたちとして残らないものも大事だと自分の故郷を思いながら考えていました。私も色々な体験をして自分のDNAをつくっていきたいと思っていました。

港

今回、遠くの様々な土地から参加があって、その方々の一言二言を聞くにつけ、鎌田さんが「11、500人の被災者がいたら11、500通りのドラマがある」とおっしゃった、その言葉を何度も僕はかみしめています。

日本ほど歴史的に繰り返し災害がある国も珍しいと言われていて、1億人いたら1億通りのドラマがあるわけです。延べにすれば、今年の水害だけでもすごい数になっていく。それはとりもなおさず、そのドラマを通して、なんとか生き継いだ人たちの11、500、あるいは1億通りの生き継いだ体験があるわけです。

ここだけではなくて

日本中に

今日、みなさんと一緒に歩きましたが、こんなきれいな町ないですよ。ちょうど紅葉のシーズンでもありますし、空気もきれいだし。こんなきれいな場所がなくなることはあり得ない。この町、この土地が生き継いでいくためのヒントは、実はここだけではなくて日本中にあるということです。

それをどう集めていくか。まさにそれがライフミュージアムネットワーク。何億通りものライフをつないでいくことによって、そのネットワークを通して、もう一度生き継いでいける。その一つの中核、組織としてミュージアムがある。そういうアイディアだと思います。

参加者・藤城光

昨日、今日、2日間参加できて良かったというのが、まず思っていることです。変わっていく圧倒的な風景の中で、その間に見え隠れする家々を、私はどういうふうに見つめればいいのだろうと、ものすごく戸惑いながら昨日は見ていました。けれども、今日は昔の風景が残るこの近くの場所を見せていただいて、今この町に起きていることがより深く感じられました。

私自身も浜通りという地続きの場所に住んでいて、記憶をどう残すかこの8年半以上、ずっと考え続けています。いろいろな感知の仕方が重要だということを、あらためて今日も感じさせていただきました。

これから先のことを考えることでもある

DNAという言葉も出ていますけれど、DNAそのものも刺激で変わっていくもので、過去のことを継ぐということは、これから先のことを考えることでもあると思いました。

受け取ったことは時間をかけて考えたいとも思いますし、大熊町のDNAが、おそらく大熊町に関わる人たちだけじゃなくて、より広く、学びであり、この先に向けて必要となっていくDNAでもあるのかなと思います。

港

たまたま藤城さんの隣でフロッタージュをしていましたが、藤城さんは柿の実をフロッタージュして、実をそのままぐしゃっと潰していた。熟した柿そのものを和紙に吸い込ませているのを目撃して、うぉっと思いました。ここに何かヒントがあるなと。つまり通常の方法をも超えてしまう、ある直感みたいな。一生懸命風を当てて乾かしていた。今日見た一番ユニークな人だった。

二重螺旋構造

事務局・川延安直

ありがとうございました。柿が確かにありました。何だかわからず展示できませんでした。すみません。

今日はDNAの話でした。藤城さんの作品で、ふと思いましたがDNAの構造はいわゆる二重螺旋構造ですよね。二重になっていて、さらに螺旋になっている。複雑なのか柔軟なのかという構造でできている。それがとても大事な気がするのです。僕らもそういう感性でやれたらいいなと思います。

港

二重螺旋で思い出しましたが、森さんが紙縒のつくり方を教えてくれました。ティッシュペーパー1枚だと簡単に破れるけれど、紙縒にして、それも1回だとちぎれるのですが、それを2回撚るとそう簡単には壊れないというすごくいい話を聞いた。それを転がすと縄文になるのです。DNAから一気に縄文まで行く非常に良いお話を聞きました。いかがでしょうか、森さん。

参加者・森幸彦

大熊町教育委員会の森と申します。縄文時代専門に研究してきました。今はとてもDNAの解析が進んでいます。縄文人のDNA、福島県新地町の三貫地貝塚から出てきた人骨のDNAと現代の日本人のDNAを比較すると、だいたい12%受け継いでいる。3、500年ぐらい前の人たちですけれど。この数字が多いのか少ないのか、聞く人によって違いますが、12%受け継いでいるのは世界中で日本人だけ。12という数字は一番多いのです。縄文人のDNAを我々は受け継いでいる。

大熊全体を集落ごとに記録していきたい

縄文話はさておいて、初澤先生や他の方々からも地域を記録してというお話をいただきました。検討委員会がつくった提言書、これは町に提言するアーカイブズの指針ですが、その中で地域史、集落史を全部つくっていこうと提言されています。特に、まずは中間貯蔵施設地域の夫沢1区や小入野や野馬形。そこから取りかかり、その後は中間貯蔵がまたがっている地域、そして変わっていく大熊全体を集落ごとに記録していきたい。これは鎌田さんが中心でやっていかれるかもしれませんけれども。

例えばダムに沈む村は、必ず国土交通省が集落史をつくるお金を出しています。環境省に国土交通省はやっていると言ったら、環境省は「わからない」と言っていましたけどね。環境省に金ぐらいは出せと訴えていこうと思っております。

やっぱり集落史をつくっていくのには民俗学や文化人類学、そういう方々の力も必要になります。我々だけではできないので、その力、聞き取りをする力を持っている人たち、みなさんも含めて、そういう方々に今後も多く協力をいただければありがたいと思っております。

港

具体的な方向性が森さんから出ました。今日のこの会がその第一歩といいますか、一つの経験となって、次につながっていくと思います。

2日間、とても密度の濃い会でした。体験はさらにもっと濃いもので、今後、何ヶ月にわたって我々が持ち帰って反芻、反省していくと思います。

そこでまた、喜浦さんに聞いてみたいこと、鎌田さんに聞いてみたいことがたくさん出てくると思います。今回のこの集まりが、一つのミニネットワークになってつながっていくと思います。

事務局さんにマイクを返しますが、その前に参加者の1人として、今回のオーガニゼーション、準備も本当に大変だったと思いますし、朝から夜までいろいろなかたちで助けていただいた。みなさんに我々参加者として心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

参加者の声

鎌田さんから直接お話を頂けたことが本当に貴重な学びとなりました。（東京都、40歳代）

1日だけの参加でしたが、はだで感じることができて、とてもよかったです。あたりまえですが、あかりがないまっくらな中帰るバスの外をみて、本当の闇をみた気がしました。大熊の方達の心の闇も感じました。鎌田さんや岡部さんの話がきけて本当によかったです。（郡山市、50歳代）

ツアーと意見交換の方法が良かった。（いわき市、50歳代）

原発事故も踏まえる必要はあると思うが“町のDNA”を考えるためには、街並みや耕（荒）地を見て考えるほうが良い。（宮城県、50歳代）

福島だけの問題ではないということ、引き続き自分がいる場所から考えねばと思いました。ありがとうございました。（東京都、40歳代）

寄稿

大熊町のDNA

写真家／著述家　港 千尋

ライフミュージアムネットワーク＝文字通り「生活と暮らし」をテーマにミュージアムの役割を、ネットワークを形成しながら探究するという取り組みも、2年目に入って中身が一段と濃いものになってきました。たとえば今回わたしが参加した大熊町スタディツアーでは、見学だけでなく、ディスカッション、展示、制作体験と、多角的なプログラムが組まれています。ひとつの地域の「ライフ」を考えるために、複数の視点を提供するということ、頭だけでなく身体を使い、知識だけでなく感覚を大切にすること、共に体験することを通じた人的なつながりを重視するということ、それらが限られた時間内に有機的に組み合わされて実行されていたことが、内容の濃さにつながっていたのでしょう。ここでは2日間の体験を簡単に振り返りながら、ツアーのテーマにあった「DNA」や「原風景」について考えてみたいと思います。

大熊町は2015年、岡部昌生さんの森のフロッタージュ制作に同行して以来4年ぶりになります。当時も今回ガイド役を務められた鎌田清衛さんの先導で、梅雨時の木立を歩いたことをよく覚えています。印象に残っている場所は、製炭試験地の跡と「捨石塚」と刻まれた小さな塚ですが、ここは日本のエネルギー政策と戦争との結びつきを示す場所として、今回のディスカッションでも話題になりました。特に「捨石塚」はその名前もさることながら、周囲に置かれた小石が、それを手向けた人の痕跡を感じさせて忘れられません。またフロッタージュ制作の場所へ向かう途中、わたしたちは足場の悪い急な斜面を登らなければならなかったのですが、落ち葉の陰に縄文土器の破片が顔を覗かせていたことも覚えています。エネルギーの歴史の遥か過去には、慎ましい生活の風景があったことを教えられました。

今回は避難指示解除となった大川原地区がツアーの対象でした。大川原地区に出来た町役場の新庁舎を拠点にした町歩き、環境省が整備する中間貯蔵施設の見学、さらに帰還困難区域のボーダーラインを見つめながらのフロッタージュ制作体験という、充実した内容でした。役場近くには住宅も整備され、お昼時にはきれいな「大熊食堂」でみなでランチをとるなど、4年前には想像できなかった変化です。もちろん長期避難生活のなかで、帰還を見送っている方も少なくないと聞きました。1日目のバスツアーで、線量がいまだに高い「帰還困難区域」の様子を外から眺めながら、寸断されてしまった町への帰還は「いつか」という不確定の時間だとあらためて思い知らされました。

その点で中間貯蔵施設地域内の見学は衝撃です。バスで区域内に入ってゆくと、まるでかつてそこにあった生活が凍結され、それを雑草や土埃が覆ってゆくという、荒涼感が漂っています。鎌田さんの自宅と果樹農園があった野馬形は、原発から約3㎞の地点、しばらく行くと屋敷森の間からベルトコンベアが折り重なるようにして見えてくる。汚染土や廃棄物を処理し、それを中間貯蔵施設へと運搬する様子は、何処か別の星の光景のようにも見えました。処理された土が埋められている谷を見下ろす地点に出ると、ダンプカーがおもちゃの車のように小さく見え、気の遠くなるような量の土を運び込み、谷を埋めてゆく光景が目に焼き付きました。津波で破壊された時のままに残された建造物も少なくなく、町の「いま」には、8年前の「かつて」が突き刺さっているという印象です。

そうした状況のなかで行われたフロッタージュ制作は、参加者全員にとって特別な体験になったと思います。帰還困難区域への立ち入りを禁止するフェンスの前に立って、岡部さんからの説明を受けてあらためて、こちら側とあちら側のどこが違うのか、違うということがなぜ続いているのかを問わずにはいられません。まったく同じにもかかわらず、立ち入る事のできない風景に対して、「見る」ことの限界を突き付けられているとも感じました。フロッタージュは、その意味で、対象に対して顔を近づけ、触れながら現実の痕跡を残してゆく作業です。同時にそれは、ある日ある時間に、確かにそこに身を置いて、その場所を眺めたという当たり前の行為の痕跡でもあります。

この体験があって、わたしたちは大熊町役場本庁舎で開かれたミニ展示「大熊町のかつての暮らし」の写真や、展示された土器や民具などと向き合うときにも、「いま」から眺める「かつて」の意味を考えさせられました。大熊町の「DNA」であるべき数限りない因子のなかの、具体的なモノでありイメージです。でもそれを語ることのできる人がいなければ、それはただのモノでありイメージに過ぎないとも言えるでしょう。その意味で、オープンディスカッション「場と記憶」で鎌田さんが話された、町内の小入野地区にある海渡神社のエピソードは、「原風景」に関するヒントを含んでいます。

春分の日と秋分の日、そこに立つと日隠山の山頂に夕日が沈む。年に2回だけ、神社と山頂と一直線に結ばれるという「現象」は、人がそこに立って眺めなければ、意味を持ちません。モノだけでなく、そこに立ってこそ得られる眺望や、「日隠」の意味を語り合う人間がいなければなりません。原風景は、都合よくどこかに転がっているわけではない。DNAという膨大な数の因子が、次世代を作る「遺伝子」となるには、それらのなかの特定の箇所を読み解き、その意味を解読し、そして次の時代へ手渡す作業が必要です。多くの人が協力し、長い時間をかけて作られるのが、「原風景」なのではないか。それが未来に横たわる「いつか」に届くための、なくてはならない道、あるいは階段になるのかもしれません。